

On the Environment in Which Men (stay-at-home dads/husbands) Can Comfortably Do Housework and Child Rearing

Naoko SHIMADA Kiyofumi TOMONO
(Showa Women's University)

Dismantling of the sexual division of labor has been hotly debated for quite a long time. While women have advanced to workplaces and other social spheres, men are still devoting their time and energy almost solely to work. As a result, married women have to take full responsibility for child care and household chores even when they are working outside home.

On the other hand, the importance of men's participation in child rearing has been gradually recognized and taking paternity leave is encouraged by policymakers and some companies. But behind this phenomenon is a tacit premise; men are supposed to have some kind of occupation. "Stay-at-home dad" is still "invisible" in Japanese society.

Our research aims to reveal the existence of "stay-at-home dads" and to shed light to their lives and consciousness through our questionnaire. We also make some suggestions for "stay-at-home dads" to be accepted in our society.

There are a few previous studies focusing on "stay-at-home dads," in which some important points have been explored. Firstly, stay-at-home dads have chosen their lifestyles of their own. Secondly, they are in general good husbands and fathers. They can establish favorable relations with their partners and children. Thirdly, nonetheless, they suffer loss of pride as men and social contact and can often feel isolated and/or frustrated.

We tentatively define "stay-at-home dads" as "men who are mainly engaged in housekeeping and child rearing and who recognize themselves as stay-at home dads." We contacted them through social media or some groups and got answers for our questionnaire from 28 men.

These 28 men are divided into three groups: those who exclusively do housework (11), those who have some kind of jobs (14) and employees now on paternity leave (3).

We have found some important aspects of being a stay-at-home dad.

As for motives or reasons for their choice, about half of the respondents cited "career or work of their partner," A quarter said they have chosen voluntarily to be stay-at-home dads.

Their degree of satisfaction about family and relatives is overall high, but they are not fully satisfied with the society at large and especially municipal officials. They are often sensitive about being prejudiced or not being understood by people around them. They also find it difficult to communicate with parents (in almost all cases, mothers) of their children's friends.

A merit of being a stay-at-home dad is to be able to discover many aspects of their children and their growth as well as problems and difficulties about bringing up children. They can have great pleasure and enjoyment, and establish good relations with children and partners.

At the same time, while they overall accept their own situations, they also harbor some anxiety about their future.

As a conclusion, we think it imperative to recognize the lifestyle as a stay-at-home dad (man), for this allows men and women to choose their way of life at their own will. By pursuing a society in which various and diverse choices of life are guaranteed and respected, both men and women can live as an individual regardless of gender. And especially men must be liberated from the norm of masculinity.

「男性（主夫）が気持ちよく家事や育児ができる環境」について

—主夫の状況と意識から—

島 田 直 子
友 野 清 文
(昭和女子大学)

1. 課題意識と本研究の目的

性別役割分業の解体が主張されて久しい。女性の社会進出はある程度進んでいるが、男性の生き方、働き方は旧態依然である。そのため女性に「家事も育児も仕事も」という二重三重の負担があることは、1998年の『厚生白書』でも指摘されている。（この白書は「三歳児神話」を公式に否定したことで知られている。）

他方で、「イクメン」に象徴されるように、男性の育児参加の気運も一定の高まりは見せている。ワーク・ライフ・バランスの実現として男性の育児休業取得の数値目標も掲げられている¹⁾。

しかし「男性の育児参加」と言われるものには、殆ど無意識の前提がある。それは「男性は（外で）働いている。」ということである。働いている夫の家事・育児参加は議論されるが、「主に家事を担っている男性」は度外視されているように思われる。実態としては主に家事を行う既婚男性は存在しているのであるが、定年退職者や自由業を除いて、そのような生き方が社会的に認知されているとは言えない。本論文の共著者の一人である島田はその当事者であり、様々な生きづらさを感じてきた。

本研究は、これまで殆ど研究調査の対象とならなかった「主に家事を担っている男性」（主夫）に焦点をあてて、彼らの生活の状況と意識を明らかにすることを目的とする。その上で、彼らとその家族が気持ちよく家事や育児ができる環境を実現するための条件を考察する。

2. 先行研究

先行研究としては男性の育児参加に関わるものが多いが、主夫についても若干見られる。

男性の育児参加についての研究は、育児休業等の労働・雇用の観点からのもの、父親や青年男性の意識を対象とした心理学の観点からのもの、子育て支援の立場からのものなどが行われている。

男性の育児休業については1990年代後半から本格的に議論が始まり、政府の「少子化対策プラスワン」（2002年）で「男性の働き方の見直し」として「子どもが生まれたら5日間の休暇取得」や「男性の育児休業取得率10%」が掲げられた。同時に男性も育児休業の取得を希望しているということが指摘された²⁾。

また船橋恵子は、子育て期の「父親がよく育児に関わっている」夫婦を対象に調査を行い、四

つの類型を示している。その中で、女性が稼ぎ手で男性が「ケアラー」（養育者）であるタイプを、性役割が逆転した「ラディカルな家族」としてしている。ただこのタイプは不安定であり、専業主夫であることは一時的なものと捉えられており、常に「男は仕事に女は家庭に」というベクトルが働いている」とされている³⁾。

心理学の領域では、大野祥子が「男性の家庭関与の高さが必ずしも共同参画意識の高さと同義ではない」と指摘している⁴⁾。職業役割と家庭役割を夫婦で共に分担することに満足を感じる「共同参画意識」は、家事を分担することをどのように捉えているかにあり、家庭関与の量だけではなく、「関与の内容や質、意味」に注目する必要があるとされる。

これらの先行研究から学ぶことは多いが、舩橋の「ラディカルな家族」を除いて、男性が職業を持っていることが前提とされている。

これに対して、八木孝憲は「専業主夫」に焦点を当てた研究を行っている⁵⁾。

八木は、専業主夫になった経緯についていくつかのパターンがあり、大きくは「最初から主夫型」と「中途主夫型」に分かれ、専業主夫を選んだ理由を①主夫前提の結婚 ②仕事に対する違和感 ③子育てのため ④体調や病気のため ⑤勉学・資格取得のため、という五タイプに分けている。また主夫家庭の特徴として①自己の内なる声 ②職場への強い葛藤感 ③育児への関心と責任感 ④妻の強い職業意識、が挙げられている。さらに主夫選択の必要条件として「妻の受容的な態度と協力」と「選択肢としての主夫」という要素がある。

そして主夫の意識を、①主夫選択による葛藤（「社会的感覚と人脈の喪失」「男のプライド」「家事のおもしろくなさ」「社会からの疎外感」）や②主夫選択による獲得（「主婦の視点の獲得」「新しい世界への気づき」「家族との時間」）、③将来展望（「主夫として生きる」「主夫は仮の姿」）、④社会制度面、と分類（概念化）している。

また米国の Boston College の Center for Work & Family の年報 *The New Dad*（2012 年）は特集のタイトルを“Right at Home”として、主夫（[stay] at-home dad）を取りあげている。

ここでは 31 人を対象としてアンケートやインタビューを行っているが、その結論は以下の通りである⁶⁾。

1. 専業主夫は「選択」による（単に失業などによるものではない）
2. 選択には多様な背景がある
3. 社会的孤立感や葛藤は女性よりも男性の方が強い
4. 妻が職業に専念できるようになる
5. 男性自身のキャリアにはマイナスとなる
6. 専業主夫は大変良い親である
7. 子育てをめぐる葛藤／負担はあるが、同時に多くの男性が経験しない子育ての報酬を得ることができる。親としての責任を果たすだけでなく、人生に意味があるという基本的な感覚が高まっている

これらの研究から分かることは、主夫というあり方は何らかの選択によって意識的に選ばれるものであるということ、そしてそこから見えてくるもの、得られるものが多いが、同時に葛藤や孤立感を持つことが多いということである。

3. 本研究の方法

本研究では主夫の生活の状況と意識を明らかにするために、当事者へのアンケート調査を行った。アンケートの実施時期は2014年2月～8月であり、対象は、インターネットのブログやソーシャルネットワークサービス利用者を「主夫」で検索し、アンケート用紙を送って協力が得られた人、またはファザーリング・ジャパン⁷⁾の「マザーリングプロジェクト」のリーダーに依頼して協力を得られた人で、結果的に28名から回答が得られた。(表1) アンケートの回答の内容が十分明らかでなかった場合は、後日メールなどで確認し補足を行った⁸⁾。

表1 コンタクトツール

コンタクトツール名	人数	割合
ブログ	17	61%
マザーリングプロジェクトより web 回答	9	32%
書籍 (著者)	1	4%
その他	1	4%
合 計	28	100%

主夫の厳密な定義がないため、アンケートでは「主夫」とは「女性（ママ）より家事や育児のことを担っている男性」という「子育て主夫ネットワークレノンパパ」⁹⁾の「定義」を参考として示し、かつ「子どもの有無は問わない」とした。結果的には、家事専業の場合もあれば、仕事を持ちながらも家事育児を行っている場合、そして育児休業取得中の場合もあった。そのため本研究での対象となる主夫は「育休者を含め、一時的にせよ主に家事・育児を担当し、かつ本人や家族が主夫と認識している（あるいはそのように見られることに抵抗がない）男性」とする。

4. アンケートの内容と結果¹⁰⁾

アンケートは設問を選択式と自由記述式の二部構成とした。選択式の設問では、自身の属性、主夫であることを周囲が知っている（あるいは周囲に知られている）かどうか（二者択一）、自分、家族や周囲への「満足度」についての自己評価（五段階）を調査した。

自由記述式の設問では、主夫となったきっかけ、日常生活での問題、主夫であることについての考え等を調査した。

1) 回答者の属性・周囲の認知状況・満足度（選択式設問）

① 属性について

表2-1は「現在の立場」、表2-2は「年齢」、表2-3は「主夫としての経験（累積）年数」である。

現在の立場では、専業主夫11人、兼業主夫15人、育児休暇中3人である。「専業」と「兼業」の区別は、アンケート項目に入れ、回答者自身が選んだものである。アンケートの回答から見ると、「兼業」を選んだのは、会社員・経営者・自営業・学生・パートアルバイト・NPO代表等で

あった。

年齢では30歳代が最も多く、次いで40歳代である。累積経験年数は、育休取得者を含めて4年以下が最も多いが、15年以上も2人いる。

表2-1 現在の立場

人数	計
専業主夫	11
兼業主夫	15
会社員・育休取得者	3
※重複有1名	29

表2-2 年齢

20代	30代	40代	50代以上	計
0	8	3	0	11
1	8	5	0	14
0	2	1	0	3
1	18	9	0	28

表2-3 夫としての経験年数

0～4	5～9	10～14	15以上	計
4	5	1	1	11
8	4	1	1	14
3	0	0	0	3
15	9	2	2	28

表3-1は「世帯年収」、表3-2は「最終学歴」、表3-3は「所属団体」である。

世帯年収では全体で300万円～600万円未満、600万円～1000万円未満、1000万円以上が各々ほぼ三分の一ずつで、専業主夫の方が兼業主夫より高額傾向がある。全体的に年収が高くなっているのは、先に述べた調査対象の選定方法と関わっていると推測される。最終学歴についても大学以上が多数である。所属団体では、延べ人数で35人中「FJ（ファザーリング・ジャパン）」と「所属なし」が14人ずつで最多である。

表3-1 世帯年収

百万円 (人)	専業主夫 (無回答1)	兼業主夫 (無回答2)	育 休 (無回答0)
3 未満	0	0	0
～6 未満	2	5	1
～10 未満	3	4	0
10 以上	5	3	2
合計	10	12	3

表3-2 最終学歴

学歴	(人)
大学	17
大学院以上	5
専門・短大	4
高校	2
中学	0
合計	28

表3-3 所属団体

所属団体(注) (延べ人数)	合計
FJ	14
レノンパパ	1
その他	6
所属なし	14
合計	35

※所属団体(注)～FJ：NPO 法人ファザーリングジャパン、レノンパパ：子育て主夫ネットワーク レノンパパ

表4は「主夫の開始時期」と「主夫になったきっかけ・背景」である。主夫となった時期については、専業主夫では、「最初から主夫」、「途中から主夫」とともにほぼ同数であったのに対して、兼業主夫は、「途中から主夫」が「最初から主夫」の約2倍となった。

主夫となったきっかけについては、「妻のキャリア（仕事）」を考慮し、自らが主夫になった人が全体の約半数近くに上った。続いて、「自らの意思」によって主夫になった人が全体の四分の一の割合となった。それ以外には「子の誕生」、「自己の求職・退職」「妻との離別」がきっかけである。「妻のキャリア（仕事）」・「自らの意思」・「子の誕生」によるものを「主體的」とし、「病気」・「自己の求職・退職」・「妻との離別」によるものを「他動的」とすると、前者が75%、後者が25%となった。主夫の多くは、少なくとも主観的には主體的に生き方を選択したと考えていることが分かる。

表4 主夫になったきっかけ

職業	最初／途中から主夫	主体的			他動的			合計	割合
		妻のキャリア	自らの意思	子の誕生	病気	求職中等	妻との離別		
専業主夫	最初から	2	2	0	0	1	0	4	14.3%
	途中から	3	1	0	1	1	0	4	14.3%
兼業主夫	最初から	4	1	0	0	0	0	5	17.9%
	途中から	2	2	1	2	1	1	4	14.3%
育休	最初から	－	－	－	－	－	－	0	0.0%
	途中から	2	1	0	0	0	0	3	10.7%
合計		13	7	1	3	3	1	20	71.4%
合計からの割合		46.4%	25.0%	3.6%	10.7%	10.7%	3.6%	割合	
「主体的」の合計		21			7			「他動的」の合計	
「主体的」の割合		75.0%			25.0%			「他動的」の割合	
「主体的」の中での割合		61.9%	33.3%	4.8%	42.9%	42.9%	14.3%	「他動的」の中での割合	

② 周囲の認知状況

経験的な観察で、主夫であることを親族や周囲に隠す場合もあることから、そのような事例の頻度をデータとして確認するためにこの項目を設けた。（表5）

ここでは自分が主夫であることを家族や親族、職場等が知っている（あるいは知られている）かどうかを「知っている」「知らない、以前は知らなかった」の二者択一で問うた。

その結果、兼業主夫においては、自分の親族に伝えていないことが多く、また妻の親族へ公言することが、他の主夫に比べて少ないことが分かった。専業主夫、育休取得者は殆ど知らせている。また病院や役所に知らせていない場合も多い。

表5 周囲への認知状況（A：知っている B：知らない・以前は知らなかった）

属性	割合	自分家族	自分親族	妻親族	自分友人	妻友人	自分同僚	妻同僚	自分会社	妻会社	病院	学校	社会全般	役所
専業主夫	B 回答数	0	0	1	0	0	0	1	0	1	3	0	4	4
	全回答数	11	11	11	11	10	5	11	5	11	9	9	7	7
	B の割合	－	0%	9%	0%	0%	0%	9%	0%	9%	33%	0%	57%	57%
兼業主夫	B 回答数	0	4	2	1	1	4	4	4	4	9	5	7	7
	全回答数	13	13	13	13	13	11	12	11	12	13	12	11	11
	B の割合	0%	31%	15%	8%	8%	36%	33%	36%	33%	69%	42%	64%	64%
育休者	B 回答数	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	1	1	1
	全回答数	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3
	B の割合	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	33%	33%	33%	33%
全体	B 回答数	0	4	3	1	1	4	5	4	5	13	6	12	12
	全回答数	27	27	27	27	26	19	26	19	26	25	24	21	21
	B の割合	0%	15%	11%	4%	4%	21%	19%	21%	19%	52%	25%	57%	57%

③ 自分自身や周囲への満足度

ここでは自分自身や周囲への満足度を「5 非常に満足 4 まあ満足である 3 どちらとも言えない 2 あまりそうではない 1 全くそうではない」の5段階での自己評価を調査した。(表6)

全体として、一人の主夫において「全体的に評価が高い」か「全体的に評価が低い」かに二極化する傾向が見られる。

若干細かく見ると、どの主夫においても「自分の家族」や「自分の親族」に対する満足度は高いが、育休取得者以外の主夫において、「社会全般」と「役所」に対しては満足度が低い。自分自身については、専業主夫・兼業主夫の平均スコアはいずれも3.6であるが専業主夫では4・5が8名、1・2が3名であるのに対して、兼業主夫では4・5が8名、1・2が4名、3が1名で、兼業の方にはばらつきが見られる。育休取得者については自分自身への満足度が高い。

表6 満足度
(5:非常に満足 4:まあ満足 3:どちらでもない 2:あまり満足でない 1:全く満足でない)

属性	点数	自分 家族	自分 親族	妻 親族	自分 友人	妻 友人	自分 同僚	妻 同僚	自分 会社	妻 会社	病院	学校	社会 全般	役所	自分 自身
専業主夫	合計	47	44	38	40	41	20	41	25	37	33	38	25	23	40
	回答数	10	10	9	10	10	5	11	7	10	9	9	9	9	11
	平均	4.7	4.4	4.2	4.0	4.1	4.0	3.7	3.6	3.7	3.7	4.2	2.8	2.6	3.6
兼業主夫	合計	61	53	44	54	54	36	43	38	43	48	45	37	38	51
	回答数	14	14	14	14	14	11	13	11	13	14	13	14	14	14
	平均	4.4	3.8	3.1	3.9	3.9	3.3	3.3	3.5	3.3	3.4	3.5	2.6	2.7	3.6
育休者	合計	15	13	15	13	13	11	12	11	11	10	14	11	12	13
	回答数	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3
	平均	5.0	4.3	5.0	4.3	4.3	3.7	4.0	3.7	3.7	3.3	4.7	3.7	4.0	4.3
全体	合計	123	110	97	107	108	67	96	74	91	91	97	73	73	104
	回答数	27	27	26	27	27	19	27	21	26	26	25	26	26	28
	平均	4.6	4.1	3.7	4.0	4.0	3.5	3.6	3.5	3.5	3.5	3.9	2.8	2.8	3.7

2) 主夫としての状況と意識(自由記述的設問)

表7では、「①困っていること、不便なこと、肩身の狭い思い・嫌な思いの体験」「②子育てをすることで見えてきたもの」「③親子関係・夫婦関係への影響」「④自分の生き方について」の各設問への回答を「ポジティブ」・「どちらでもない」・「ネガティブ」に分類し、その数をまとめた。

ポジティブとは、自己や現状を肯定的に評価する回答で、ネガティブとは、自己や現状を否定的に評価する回答とする。一人が複数の意見を書いている場合は、テーマ・内容別に数えた。各設問への回答の概要と具体的内容を示す。

表7 自由記述的設問の回答数の分類

延べ回答数	①			②			③			④		
属性	専業	兼業	育休	専業	兼業	育休	専業	兼業	育休	専業	兼業	育休
ポジティブ回答	4	4	1	7	19	3	8	14	2	13	11	3
どちらでもない回答	6	17	3	1	2	0	6	2	1	3	2	0
ネガティブ回答	36	41	9	3	2	2	2	4	0	2	2	0

① 困っていること、不便なこと、肩身の狭い思い・嫌な思いの体験

設問の性質上ネガティブな回答が多くなった。内容としては、周囲（親族・職場・地域・社会）の意識・まなざしが最も多く、次いで人間関係、行政に関わるものになる。実生活上の不便さも数は少ないが散見された。

「意識・まなざし」の問題としては、「男は働いて（稼いで）当然という意識」「主夫への認知度・理解不足」等である。あるいは「アンケートに『主夫』という選択肢がない」「主夫＝無職とされる」というものもある。

[ポジティブ]

- ・世間への期待が低い為か主夫である自分が特殊という意識もあり嫌な思いは無い。むしろネタとしてギャップを楽しんでいる。

[ネガティブ]

- ・子供を病院へ連れていくと待合室では他のママに睨まれ、診察室では医師からパパで普段の子供の様子が解るはずないと扱われる。保育園では裏門から入る様に言われる。
- ・男女共同参画を謳う筈の行政では、担当者の意識の中に主夫が位置付いてなく、見下される。また、職業欄に「主婦」はあっても「主夫」はない。スピード違反で捕まった際に警察官より「無職ですね」と言われ嫌な思いをした。
- ・妻が娘を連れて実家へ行った際に、妻が妻の妹より「姉さんの旦那はヒモだ」と1歳過ぎの娘の居る前で言われた。このことを妻が妻の母に相談したら「まだ解らないのだからいいじゃない」と言われた。他人はまだしも一番理解して貰いたい身近な親族からのこのような対応は侮辱的だった。

② 子育てをすることで見えてきたもの

これについては殆どすべてポジティブな評価・意見が出された。内容としては、子どもの姿や成長に関わる「発見」、子育てのつらさや大変さ、自分自身の振り返り、そしてそれらを通じて見えてくる社会や政治のあり方、働き方等の問題である。

[ポジティブ]

- ・子供と関われる時間は貴重である。子育ては何よりも難しいけど楽しく感動的。子供が乳幼児の際は一日中子供と向き合い孤独を感じることもあるが、子供の生活に自分を併せる事で自分自身も変化する。日本の将来を考え、地域社会との繋がりも持てた。
- ・子供は社会の財産と感じる。また自分が家庭内（ミクロ）の問題をじっと観察する事で政治・行政（マクロ）の問題も見えてくる。国の子育てや介護の対策にやる気が見えない。少子高齢化の中で女性が仕事と家事の過重労働を強いられるのは持続不可能で歪な社会構造であ

る。子育てを通して自分の視点が広がるのは良い。子供との絆が深まった。

[ネガティブ]

・子育ては辛い。

③ 親子関係・夫婦関係への影響

親子関係・夫婦関係とも概ねポジティブな捉え方がなされていた。親子関係では、子どもと過ごす時間があり、関係が深まるという点と、親としての生き方が子どもへのメッセージとなる、という意識が見られる。夫婦関係では、夫婦で生き方を話し合うことで関係が深まった、役割を主体的に決めることで相互理解や感謝の念が強くなるというものがあった。

[ポジティブ]

・お互い理解が深まり尊重し合えたり助け合えたりできる。コミュニケーションが増す。

[どちらでもない]

・最初から自分が主夫の状態なので比較ができず解らない。

[ネガティブ]

・妻がよく「私（女性）も男社会で苦勞している」というがその逆（男性の女社会での苦勞）より百倍楽だと思う。会社なら仕事の実績で評価されるが自分にはそれが無い。

④ 自分の生き方について

全体として「ポジティブ」な評価・意見が出され、主夫というあり方を肯定している、あるいは受け入れている場合が多い。しかし「このままでいいのか」「将来はどうなるのか」という不安が同時に見られる。また「特別なことではない」という回答もある。

[ポジティブ]

・自分の人生の良い経験になっている。仕事・家庭・地域での居場所の重要性を考える。
・キャリアダウンになるが「男は外で仕事」という自分の固定概念を変えられて良かった。
・常識ではなく個人が自由に生き方を選択していく事がこれからの時代に必要だと思う。

[ネガティブ]

・このままで良いのかどうかはいつも考える。自分のミッションや価値観などを自分自身で明確にすることが重要と考える。将来に不安を感じる。
・少ない主夫の中で、更に少ない「子供がいない主夫」はどこへ行けばよいのかと考える。

3) アンケート結果からみる主夫の状況と意識

以上のことから主夫の状況と意識については次のようなことが明らかとなった。

第一には、先行研究でも指摘されていたが、主夫は（少なくとも主観的には）「選択」によるものである。そして選択の基準は「妻の仕事（キャリア）」と「自分自身の意思」が多い。主夫を選んだことへは概ね肯定的であるが、生活の中では、孤立や将来への不安、社会の意識が主夫という選択を困難にする要因となっている。

第二には、「主夫」としての状況と意識には「主婦」と共通する問題・意識（社会からの孤立感、家事育児の負担）と同時に、「女性が男性社会に入っていくことは、その逆の『百倍楽』」という回答があったことに見られるように、母親同士の関係に入れない等、男性特有の問題もあると言える。

第三には「主夫」意識の多様性である。アンケート実施に当たって、ある父子家庭の父親からは「父子家庭の父親は家事・子育てはしているものの、主夫ではありません」と断られた例があった。このように明示的ではなくとも、自らを主夫と見なしていない場合は、回答自体をしないとされる。逆にアンケートの中の「肩身の狭い思いや嫌な思いをした経験」の設問において「シングルファーザーと間違われた」という記述が見られた。また、会社を辞めて育児をし、再就職した男性からは「私は自主的に会社を辞めて子育てに専念していた形で、主夫とはまた違うものと認識している」との意見があった。

また「主夫にも様々な形態があり、全時間を家事や子育てに費やす人は少数派なのではないか。自分は家事にしか向かない人間だとは思わないので、家事や子育てが好きで主夫になっている方と同類とは思わたくありません」という回答も見られた。さらに自由記述の具体例でも挙げたように「少ない主夫の中で、更に少ない子どもがいない主夫はどこに行けばよいのかと考えています」というものもあった。

このように主夫について考える場合、客観的状況と同時に当事者の意識のあり方も課題となる。そして意識は多様であり、家事を担っていても主夫であると考えない（主夫と見られたくない）場合もある。このような男性のあり方を「主夫」という言葉で括ることが妥当なのかどうか問題となるが、今後の課題としたい。

5. 結論

以上のことから、本研究のテーマである「男性（主夫）が気持ちよく家事や育児ができる環境」を実現するためには次のような条件が必要であると考えられる。

（１）「主夫」という存在を可視化していく。

行政や企業が主導して、書類等における「主婦」を「主夫／主婦」にするなど、「主夫」を明示することで、その存在を意識化することが重要である。また、子育て支援の資料等によく見られる「ママ」は「パパ・ママ」もしくは「主たる養育者」等という表現を用いる。

（２）主夫を含めて多様な人生選択が認められ、個々の生き方として理解される。

厚生労働省による「イクメンプロジェクト」¹¹⁾においては男性の育児支援が進められているが、これはいわば企業の側から発想されたものであり、「イクメン」という言葉は「働いている男性が育休を取得して子育てをする」という意味で用いられている。即ち、本研究のアンケートの対象となっている「仕事を持たない主夫」は基本的に除外されているのである。この点を考慮しなければ、「イクメン」に光が当たるほど「仕事を持たない主夫」が見えなくなっていくこととなる。

上野千鶴子は、かつて主婦論争を分析し、「住縁社会（血縁＋地縁）、社縁社会、知縁社会の『最適混合』が不可欠」と述べ、「男性には住縁社会への一層の参加」を確保すべきとした¹²⁾。

男女を問わず個人として、あるいは親として、人生のステージに応じた生き方・働き方を選ぶ中で、主に「住縁社会」に参加する場面は当然生まれるのであり、特に男性がそのような選択をすることについての、行政や専門家を含めた社会からの理解と後押しが重要である。

(3) 社会が「男らしさ」の意識（規範）から解放される。

本研究で明らかになったことは、「主夫」という生き方を選ぶ際の困難の多くは周囲の意識や視線であるということである。そこには「男はこうであるべき」（とりわけ「家庭の家計維持者」）という暗黙の規範が存在しており、そこからはずれる人を「抑圧」することになる。(1) (2)を進めることと並行して、男らしさの問い直しが必要である。

本研究では、自らを主夫と見なし、何らかの情報発信を行ったり、団体での活動に携わっていたりする男性を主な対象としたが、男性が家事や育児あるいは介護に関わることはある意味で当然のことである。男性が家族や地域の生活により参加するという選択が可能になるためにはどのような条件が必要であるのか、今後とも検討していきたい。

末尾ながら本研究のアンケートにご協力頂き、個人的な事柄についてご回答頂いた方々に心よりお礼を申し上げます。

注

- 1) 「仕事と生活の調和推進官民トップ会議」（政労使等の代表者の会議）が策定した「仕事と生活の調和推進のための行動指針」（2010年改訂版）では、2020年の男性育児休業取得率13%〔策定時直近では1.23%〕、6歳未満の子どもをもつ夫の育児・家事関連時間を1日当たり2時間30分〔同30分〕としている。
- 2) 佐藤博樹・武石恵美子 『男性の育児休業』 中公新書 2004年
- 3) 船橋恵子「平等な子育てに向かって―“夫婦で育児”の四類型」『国立女性教育会館研究紀要』Vol.8 2004年 18～19頁
- 4) 大野祥子「育児期男性にとっての家庭関与の意味：男性の生活スタイルの多様化に注目して」日本発達心理学会『発達心理学研究』第23巻第3号 2012年 295頁
- 5) 八木孝憲「変化する家族の形態 ―専業主夫家庭の実態とその生き方に関する臨床心理学的研究―」『山梨英和大学心理臨床センター紀要』(3) 2007年
2007年に実施され、アンケートは17組、インタビューは7名を各々対象としている。
なお以下の文献も参照のこと。
八木孝憲「家族のオルタナティブ・ライフスタイルとしての専業主夫―家事育児に専念する男性（父親）に関する質的分析―」『家族研究年報』No.23 2009年
- 6) Boston College Center for Work & Family The New Dad Boston 2012 pp36-37
(<http://www.bc.edu/content/dam/files/centers/cwf/pdf/The%20New%20Dad%20Right%20at%20Home%20BCCWF%202012.pdf> 2014年8月30日参照)
- 7) 「父親であることを楽しもう」を目的として2006年に設立されたNPO法人。
- 8) この方法では、何らかの形で自らのことを情報発信しているか、団体に所属している人が選ばれることになり、当然サンプルに偏りが出るとは予想され、後述のように実際にそのような傾向も見られるが、他に対象を選ぶ方法がなく、先行研究でも同様の方法を取っていることから、この方式を採用することとした。
- 9) 2011年4月に発足。会員間での情報交換や交流会等の他、「もっと自由な「家族のカタチ」

を選択できるような社会に変わってほしい」と講演や HP で情報発信を行っている。

(<http://www.lennonpapa.org/concept.html> 2014 年 2 月 4 日参照)

- 10) 回答者の属性や回答内容については、個人が特定されない範囲でのみ触れる。そのため詳細な属性等は取り上げることができないことをお断りする。

- 11) 厚生労働省雇用均等・児童家庭局が 2010 年度から実施している取り組み。

プロジェクトの HP では趣旨として以下のように述べられている。

「イクメンとは、子育てを楽しみ、自分自身も成長する男性のこと。または、将来そんな人生を送ろうと考えている男性のこと。イクメンがもっと多くなれば、妻である女性の生き方が、子どもたちの可能性が、家族のあり方が大きく変わっていくはず。そして社会全体も、もっと豊かに成長していくはず。イクメンプロジェクトは、そんなビジョンを掲げて発足しました。今、育児にもっと関わりたいという男性が多くなっています。また、制度改正により男性も育児休業が取りやすくなりました。このような環境づくりに、社会全体で、より積極的に取り組んでいくため、プロジェクトを推進していきます。」(<http://ikumen-project.jp/project/index.php> 2015 年 3 月 20 日参照)

- 12) 上野千鶴子『主婦論争を読むⅡ 全記録』勁草書房 1982 年 271～273 頁

New Representation of American Men: An essay on Steven Soderbergh's *Magic Mike*

Kazuhiro KUNITOMO
(Doshisha University other)

As Laura Mulvy said in her groundbreaking thesis “Visual Pleasure and Narrative Cinema,” objectification of the naked body was once reserved for female characters in films. Although it is no longer rare today for women to view male nudity, *Magic Mike* is an extreme example of the reversal of Mulvy’s theory. The film portrays male strippers who spectacularly expose their naked bodies to female audiences. The film’s director Steven Soderbergh has made shifting gender and sexuality norms a theme throughout his films such as *Sex, Lies and Videotape*, *Behind the Candelabra*, and *Erin Brockovich*. *Magic Mike* continues this theme by challenging conventional representations of male gender and sexuality.

The new American manhood can be sensed from many of the film’s scenes. The male strippers express shyness or seduction when they take off their clothes in front of female audiences. Their chests are so muscular that they appear similar to women’s breasts. They emphasize their female-like chests and nipples to flaunt the feminine and passive aspects of their sexualities. Furthermore, the men shave and clean their bodies in order to be gazed upon. On the surface, they appear quite contrary to past portrayals of men.

However, the structure of the story is essentially very traditional and unchanged. The male strippers still display conventional masculinity on stage, behave violently and mysteriously, and even dominate and rape a woman. *Magic Mike* can also be classified among stories of boys’ initiations into manhood, as the protagonist Mike grows through homo-social bonding with other male strippers and eventually develops a heterosexual relationship with a woman. Therefore, *Magic Mike* is a stereotypical story filled with naked male bodies.

It has been said that male nudity reveals men’s anxieties regarding their male identities. The male characters in this film are also suffering from male identity crises in an era in which manual labor is marginalized and working for a corporation also ruins masculinity. Revealing their naked bodies might be the only way in which they can demonstrate their manhood.

In this thesis, the points noted above will be examined.

映画『マジック・マイク』 で考える 21 世紀ハリウッド映画の男性表象

國 友 万 裕
(同志社大学他)

1. 女・見る主体 男・見られる客体

アメリカ映画とジェンダー表象ということになれば、何よりもローラ・マルヴィの「視覚的快楽と物語映画」(1975)をあげなくてはならないだろう¹⁾。性的に非対称な映画の世界では、性的な見世物として表象されるのは女性の身体であり、それを見つめるのが男性の視線であるというマルヴィの理論は、アカデミズムの世界に大きな影響をあたえた優れたものである。とは言うものの、発表されて 40 年が過ぎた今では、もう古い面もあるのではないか。マルヴィは、女性の身体が強度の衝撃をもったものとして客体化されるのに対し、男性の身体は視線の客体となることに耐えられないのだと分析しているのだが、この部分には『ランニング・スケアード』のピーター・リーマンも早くから疑問を呈している。男たちも体を見せたい／見られたいという欲望はもっているというのである²⁾。

1950 年代の男性裸体について論じた、スティーブン・コーハンの『マスクド・マン』などでも言及されているとおり、50 年代の男性スターは裸体になったときに、胸の筋肉を見せるため、胸毛を剃っていたとされている³⁾。リチャード・ギアの裸身が大きな話題となった、『アメリカン・ジゴロ』(*American Gigolo*, ポール・シュレダー監督・1980)あたりから、男性裸体の被写体性は意識的にクローズアップされるようになり、80 年代になると『ランボー』(*Rambo*, テッド・コッチェフ監督・1982)や『ターミネーター』(*The Terminator*, ジェームズ・キャメロン監督・1984)シリーズのようなアクション系の裸身から、『トップガン』(*Top Gun*, トニー・スコット監督・1986)などのようなヴィジュアルなものまで、徐々に男性の裸身が強烈なインパクトをもって描かれるケースは増えていった。

とはいうものの、男の裸身と女の裸身に向けられる視線の質は異なっているし、裸身の示し方も異なっている。拙著『マッチョになりたい!? 世紀末ハリウッド映画の男性イメージ』⁴⁾のなかで、筆者は、20 世紀末のハリウッド映画の男性の身体表象を分析したが、分析の結果、明らかとなったことは、男性裸身は男たちのホモエロティックな憧憬の表象であり、女性よりもむしろ男性の視線に向けられた男根的な表象であるということだ。一方で、女性の視線はほとんど問題にされない。例えば、『アメリカン・ビューティー』(*American Beauty*, サム・メンデス監督・1999)は、主人公レスター(ケヴィン・スペイシー)が娘の女友達アンジェラ(ミーナ・スヴァーリ)の視線を意識して、シェイプアップで自分の身体を見世物化するために奮闘する話であり、文字通り、「男・見る主体 女・見られる客体」というマルヴィの説をひっくり返した話であるが、皮肉なことにレスターの鍛えられた裸身は、アンジェラよりも、隣人フィッツ(クリス・クーパー)の同性愛的な欲望、あるいはレスター自身のナルシズムを満足させるものとして客体化

されていく。女性が視線の主体にはなっていないのである。マルヴィの説を反転させた「女・見る主体 男・見られる客体」の映画ではなく、「男・見る主体 男・見られる客体」という示され方と言っている。この映画と限らず、同著で分析した映画で、女性が視覚的な性欲を男性裸身に催す映画は、1本もなかった。また、裸身の提示のされ方も男根的であり、女性の脱ぎ方とは違っている。

21世紀になって、ますますジェンダーやセクシュアリティは多様化しているように見えるのだが、さらに男性の裸身表象への視線やその提示方法は変化したのだろうか。本論では、スティーブン・ソダーバーグ監督の『マジック・マイク』(Magic Mike, 2012)を使って、そのことを考えてみたいと思う。

『マジック・マイク』は、男性ストリップを正面から描いた、先駆的な映画として映画史に残るものとなるはずである。男性ストリップといえば、イギリス映画で、アメリカでも高い評価を得た『フル・モンティ』(Full Monty, ピーター・カッツネオ監督・1997)が有名だが、この映画は、サッチャー政権下で失業した男たちがやむなくストリップをせざるをえなくなるコメディである。見せるにはお恥ずかしいような身体を、お金のためにあえて見せざるを得ない男たちの姿が哀しくもおかしく、笑わせる。最初から男の裸身を性的対象物として、美しく見せることが目的の映画ではないことは言うまでもない。しかし、『マジック・マイク』は、プロの男性ストリッパーたちを描いている。振り付けや踊りなども見事で、プロでなくてはできない技術を堪能させてくれる。主人公マイク役のチャニング・テイタムは、実際にストリッパーだった経験のある人であり、この映画で大ブレイクして売れっ子になった。今、最も人気のあるスターの一人であるのと同時に、『フォックス・キャッチャー』(Foxcatcher, ベネット・ミラー監督・2014)など、他の映画でも裸身を見せる頻度が最も高い男性スターの一人でもある。彼に誘われてストリッパーの世界に足を踏み入れる、アダム役のアレックス・ペティファアはファッション・モデルでもある美青年だ。また彼らの親分格のストリッパーを演じるダラス役のマシュー・マコノヒーは、この映画の演技で絶賛を勝ち得、さらに翌年の『ダラス・バイヤーズ・クラブ』(Dallas Buyers Club, ジェン・マルク・ヴァレ監督)でアカデミー賞主演男優賞を獲得し、好調の波にのっている。テレビシリーズ『ホワイト・カラー』(White Collar, 2009～2014)で人気の美男スター、マット・ボマーも脇役で出ている。これだけの男達が美しい裸身のパフォーマンスを、大勢の女性観客の前でたっぷり披露するのだから、まさしく、「女・見る主体 男・見られる客体」の世界である。

監督のソダーバーグは、男性ジェンダーやセクシュアリティの角度から考えた場合に、常に先駆的な映画を創ってきた人だ。彼は、若干20代の時に、『セックスと嘘とビデオテープ』(Sex, Lies, and Videotape, 1989)でカンヌ映画祭のパルムドールを得て一躍有名となったが、この映画では、性的不能でありながら、女性がセックスについて語るビデオには欲情する若い男(ジェームズ・スペイダー)を描いている。ジュリア・ロバーツにアカデミー賞主演女優賞をもたらした、『エリン・ブロコビッチ』(Erin Brockovich, 2000)では、彼女が仕事に猛進している間、彼女の恋人(アーロン・エッカート)が育児などをして、主夫として生活する。彼はあくまでも助演的な役どころではあるものの、男は仕事・女は家庭という伝統的なジェンダーの反転を描いたものとして記憶に留められるべき映画だろう。また、ソダーバーグが『マジック・マイク』の後に撮った『恋するリベラーチェ』(Behind the Candelabra, 2013)はゲイ映画の歴史に名を連ねる映

画となるに違いない。この映画は、ゲイであったことで有名な実在の音楽家リベラーチェ（マイケル・ダグラス）と若き恋人（マット・デイモン）の関係を描いたものであるが、作品の評価は高く、エミー賞やゴールデングローブ賞を得ている。ハリウッドのメジャーなスターを使った映画で、これだけ男同士の激しいラブシーンを描いた映画は他に例がない。実はこの映画は、日本やイギリスでは劇場公開されたものの、アメリカではテレビ映画である。あまりにも過激な男同士のセックスシーンがあるため、ハリウッドの映画会社が出資してくれず、テレビ会社でつくったという曰く付きの映画である。

考えてみれば、男の裸が性的対象物として、たっぷり出てくるという意味では、『マジック・マイク』も『恋するリベラーチェ』と同じである。しかし、後者は同性愛の文脈のなかでの男性裸身であるため、まだ同性愛に不寛容な面のあるハリウッドでは製作が躊躇されたのだろう。ちなみに『マジック・マイク』は、2015年に続編も公開される。異性愛の文脈であれば、いくら男の裸がでてきても、ハリウッドは寛容なのである。

こう考えてくると、『マジック・マイク』は、21世紀の男性表象を考えるのに最も適した映画であると思える。ジェンダー・センサティブな監督によってとられた男性ストリップの話であり、しかもストリップの観客に男性は一人もいない、ゲイの登場人物も出てこない、異性愛の文脈となれば、マルヴィの理論を再考するのにふさわしいものとなるのである。この映画、ストーリーの枠組は、決して真新しいものではない。アメリカ映画は、描き方は変わっても、本質的な男性中心主義の枠組は死守されることは、『映画の中の女と男』のベンショフとグリフィンなども語っていることだが⁵⁾、この映画の場合も、マイクがストリップの世界で悩みながら成長し、最終的にはストリップの世界から足を洗うことを決心するまでの物語であり、アメリカ映画の最も得意とする男性のイニシエーションのドラマである。常套的なモチーフを男性ストリップの世界という背景で焼き直したもののなのである。

21世紀の映画で、男の裸身が女性の視線に向けて客体化されるとき、その表現方法はどうか変化する、そして、それを見つめるまなざしはどうか変わったのだろうか。本論では、その部分に注目したいと思う。

2. 21世紀の男性裸身とは？

リチャード・ダイヤーは、1982年の論文で、男女の裸体表象の非対称性に注目し、女性は恥じらう、あるいは相手を誘う様子で裸になる、すなわち、相手の視線を意識しながらじらしながら脱ぐ、しかし、男性は何かに取り憑かれているような表情、すなわち視線を意識していない表情で裸になると考察している⁶⁾。かつては、女性は自分の身体を性的客体物として意識しているが、男性の方は性的客体物にならない精神性をもたなくてはならないというジェンダー意識があったと思われる。視線に屈しないのが男らしさなのだ。事実、20世紀の映画はこの説を裏付けるものが多かったように思われる。『インサイド・アウト』⁷⁾のなかで、カーク・ダグラスなど50年代のスター男優たちが、視線を意識しない表情で裸になっていることは、リチャード・マイヤーも指摘している。しかし、『マジック・マイク』を見てみると、この説ももはや古くなってきている部分があるのではないかと思わせる。『マジック・マイク』の男たちの脱ぎ方は、誘

惑と恥じらいという部分では、従来の女性の脱ぎ方と変わらないからである。

映画の開幕、ショーの前座の場面。ベテランのカリスマ的ストリッパーであるダラスの後ろ姿が映る。その向こう側には彼を楽しそうに見つめるたくさんの女性観客たち。「ここは触っていいと思うか」、どうやら、彼は自分の乳首を指差して、この台詞を言っているようだ。次に、「ここは触っていいと思うか」と自分のお尻を触る彼の後ろから全身のショット。そして、彼の前からの全身のショット。彼は前開きのベストを着ているので、胸から腹筋にかけてが、少し離れた角度から見える。最後に「ここは触ってもいいと思うか」と股間を触る彼。そして彼の胸から上のアップ。ダラスの胸は見事な大胸筋である。ダラスのストリップは堂にいて、お客を喜ばせるコツを心得ている。「いやいやいや、触っちゃいけないよ。でも、今日はルール違反を出しちゃおうかなあー」とじらすダラス。彼を見ていると、裸を見せながら、「相手を誘っている」ことは一目瞭然である。

一方で、新人アダムのデビューのステージでは、彼の「恥じらい」の様子がたつぷりと描かれる。アダムはまだ未成年であり、場慣れしていないのに、フード付きの赤いトレーナーという格好のまま、大勢の女性の前に投げ出されて、照れ臭そうに、バツが悪そうに服を脱いでいく。バックにはマドンナの「ライク・ア・バージン」が流れる。彼のウブな、可愛い姿に女性たちは歓声をあげる。ダラスのような経験を積んだ男の裸もいいが、まだストリッパーとしては童貞の男の脱ぐ様子も女性の母性本能をくすぐるものなのだろう。

男性ストリッパーたちがアピールするパーツは、胸、お尻、ペニスである。女性ストリッパーの場合でも、とりわけ視線を意識するパーツは胸、お尻、性器であるはずで、ここも女性と変わらない。

また、この映画で印象深いのはダラスの胸の強調である。ダラスは、素肌に、前のあいた、丈の小さい、黒のベストをひっかけて登場する場面が多い。すなわち、ほとんど上半身裸なのだけど、完全な裸ではない。ベストをきているので、微妙に隠れるところがでてくる。しかも、前を閉めずにひっかけているだけなので、ベストは容易に動き、ダラスが動くごとに、ベストが裸の胸との境界線をかき乱していく。ベストがめくれて、彼の大胸筋と乳首が見えたり、見えなかったりする。このことが彼の胸を猥褻なものにしているように思える。驚田清一の『モードの迷宮』によると、「この境界線によって、際立たされた素肌と布地の対照は、見せる／隠すという相反する二つの運動を交叉させ、そのことによって視線をますます熱くする」のである⁸⁾。

日本でも、この頃、性的な欲情を催させるような見事な男性の胸板のことを「雄っぱい」などという言葉で言うようだが、発達した男性の大胸筋は女性の乳房と類似したものとなることは、イヴォンス・タスカーなども指摘してきたことであった⁹⁾。『オトコのカラダはキモチいい』では、この男の胸について面白い考察が述べられている。男の乳首などというのは、あまり真剣に論じられたことがないテーマだが、アダルトビデオなどで、もっぱら乳首を愛撫されるのは、攻めではなく受けの男性であるというのである。すなわち、男性が、性行為で、受動的立場になるときに、男の乳首が重要な意味をもつというのだ¹⁰⁾。

『クルージング』(Crusing, ウィリアム・フリードキン監督・1980)『マイ・プライベート・アイダホ』(My Private Idaho, ガス・ヴァン・サント監督・1991)など、ゲイを描く映画では男が男の乳首を愛撫する場面はしばしば出てくる。『羊たちの沈黙』(Silence of the Rams, ジョナサン・

デミ監督・1991)で、ジェンダー・パニックを体現するバッド・ビルが乳首にピアスをしている場面は有名であるし、『氷の微笑』(Basic Instinct, ポール・バーホーベン監督・1992)では、シャロン・ストーン扮するバイセクシャルの女がマイケル・ダグラスの乳首を愛撫する場面が出てくる。伝統的な意味では、乳首は女性の性感帯であり、性的に受け身となるのは女性であるが、徐々にその構造が変化していき、反転していつていくことがうかがえる。

ダラスは、ステージ上でも、乳輪の周りに指で円を描くパフォーマンスをして、自分の乳首を強調する。このジェスチャーは、「俺は、男だけど胸も感じるんだ」ということを示すものだ。すなわち、彼は、受けの要素・女性の要素も備えているのだということをアピールしている、そのことが観客の女性たちをさらに面白がらせるものとなる。

ダラスと限らず、他のストリッパーたちも、それぞれ見事な胸板を誇示しているが、きわめて意味深なショットは、楽屋の場面で、座っているアダムの顔の隣にマイクの裸の胸が映る場面だろう。マイクの顔は映っていないため、裸の胸板の断片化である。カメラはアダムの顔とマイクの裸の胸が並んでいるのをフレームのなかに収める。この場面は、二人が向かい合っていれば、アダムの視線の位置にマイクの大胸筋がくるということになり、胸を愛撫する位置ということにもなる。胸はもはや女性のシンボルではなくなってきたといえるかもしれない。この辺りも、変わっていく男性性を示している。

この映画のストリッパーたちは、女性が嫌うような、むだ毛や汚れや臭いなどはすべて身体から除去している。アダムが洗面所で脱毛の処理をしている場面が出てくるが、アメリカでは大ヒットとなった『40歳の童貞男』(The 40 Year Old Virgin, ジャド・アバトー監督・2005)のなかでも、「脱毛なんてゲイのすることだ」と言われながらも、主人公が女性と付き合うために毛深い体を脱毛していく場面があった。ここは、男であっても、自分の裸身を性的客体物として美しくしなければ、女性とはつきあえない時代となったことを示唆している。

最近になって、メトロセクシャルという言葉が生まれたが、メトロセクシャルは、フェミニンで、スタイリッシュな、シェイプアップやファッションに気を遣う、都会生活の男性をさす。ゲイやストリッパーだけでなく、今となっては、ストレートの男性も、自分の身体を性的客体物と捉えているため、視線を意識していい、そして、そのことが男らしさを損なうことはないということをマイケル・フロッカーは訴えている¹¹⁾。誘惑と恥じらい、胸の強調、脱毛、かつては女性の裸身表象の要素だったものを、男性がとりこむ時代になったと言えるだろうか。「見られる存在」としての自意識をもち、しかも、男性的な肉体ではあるものの、なおかつ女性の好みを取り込んだ身体を築きあげるのが、21世紀の男性の一つのトレンドと言っているのではないか。

3. 揺るがないジェンダー・アイデンティティの伝統

とはいうものの、『マジック・マイク』の男たちがステージで演じるのは、男性的支配である。タンクトップ、アーミーファッション、水兵服、カウボーイ・ハット、野球帽、警官服など彼らのファッションは戦う男の装いである。『レスラー』(The Wrestler, ダーレン・アロノフスキー・2008)のミッキー・ロークを思わせる風貌のストリッパーがターザンのようなパフォーマンスをする場面もあるし、ペニスを握って、機関銃のように動かすパフォーマンスなど、徹底的に男性

性のシチュエーションを彼は演じる。裸体にネクタイという姿は、男性ストリッパーの象徴的なファッションと言っていい。ストリッパーにとっては、鍛え抜かれた裸体こそがファッションであり、ネクタイは、『性とスーツ』でアン・ホランダーが指摘しているように男根の象徴なのである¹²⁾。そして、ステージ上を、しなやかに機敏に動いていく運動神経。まさに、男性ストリップは男性美のスペクタクルである。

時々、息抜きのように、先に挙げたアダムのパフォーマンスのようなものが描かれるが、基本は支配であり、例えば、それはお尻の描写にも端的にあらわれているように思える。アダムのパフォーマンスでは、アダムのお尻がご愛嬌のように描かれるが、これは例外的な場面であり、それ以外の場面では、男たちはお尻を見せる場面、紐のようなふんどしでアナルだけは隠している。ここには重要な意味がある。遠藤徹が『ポスト・ヒューマン・ボディーズ』で指摘しているのだが、ペニスとアナルの見た目の裸体は脆弱なもの見え、笑いを誘う。しかし、それが隠されると男らしい体になるのである。したがって、お尻はほとんど全部見えていても、アナルを隠す紐が一本あることが男らしさのシンボルとなるのだ¹³⁾。

また、彼らの衣装の色に注目してほしい。この映画のストリッパーたちは、主として黒、あるいは黒に近い色の衣装で登場する。とりわけダラスはほぼ一貫して、黒の皮の服である。これは『ターミネーター』のアーノルド・シュワルツェネッガーにつながるもので、遠藤は、「黒い革ジャンやサングラスといった外的な装いによってもう一つ上の男性性の次元へと高められることになる」「人間的な目の表情を隠し、生身の身体を隠すことで得体の知れない存在へと昇格するのである。革ジャンもサングラスも黒であることが肝要だ。黒はすべての色を呑み込み、打ち消す無表情な色だからだ。白のようにあらゆる色にすぐに侵されて（＝犯されて）しまう受動性とそれは対極にある」など、興味深い考察を示している。

遠藤のいう得体の知れない男性性とは、『マジック・マイク』のストリッパーたちのパフォーマンスを解説するキーワードである。マイクを中心にしたショーの場面で、レインコートで全身を覆った男たちが現れ、傘を使ったダンスをしながら、徐々に裸になっていくところの謎めいた支配性を説明するものだろう。また男性ストリッパーたちは出前ストリップもやっていて、女子寮に黒ずくめの警官の格好をして現れ、彼女たちを襲おうとする一幕がある。一瞬騒然となる彼女たちだが、実はこれはストリッパーたちのサプライズ・パフォーマンスである。

ダラスは、後輩のストリッパーたちに、女性の「夫や一夜限りの相手になったつもりで、男のもので支配しろ」と教唆し、腰を回す動作やペニスの挿入の動作をいかにうまく演じるかを教育していく。「どんどん回せ、もっとだ、蛇だ。3回目でつくんだ」と女性を襲い、激しく犯すような演出をしようとする。しばしば男性の男性的な裸身は不安の表象であるとされる。彼らが自分の男性性に自信がないから身体だけでも男性的にして可視化し、「俺は男だ」というジェンダー・アイデンティティを確認する行為なのである。女性が裸になる時、男の視線を取り込みながら、自らも欲情していくと言われるが、男の場合も男性的な支配を女性に向けて演じることで、自ら欲情しているのである。ベテランのダラスが、この仕事に取り憑かれてしまっているのは、自らの男性性に欲情できるからであろう。

一方、女性観客たちが求めるのは、一時のアバンチュールの相手とセックスする幻想であり、楽しんだ後は夫の元に戻っていける、そういう男と一時を過ごしたいのだ。レイプ願望とレイプ

幻想（レイプファンタジー）が違っていることは、杉浦由美子なども指摘している¹⁴⁾。現実にはレイプされることを望む女はいないが、ファンタジーの世界でレイプされる自分を想像してマスターベーションをする女は多いと言われる。それは彼女たちが、女はセックスに関して受動的であるべきというジェンダー・アイデンティティを内面化しているからで、女性アイデンティティを損なわずに性欲を満足させる手段なのである。

したがって、『マジック・マイク』で描かれるのは、自分の男性アイデンティティを確認しようとする男性ダンサーたちと、自分の女性アイデンティティを満足させようとする女性たちということになる。したがって、伝統的なジェンダー・アイデンティティに根ざしている。

またストリッパーの世界が、きわめてホモソーシャルであることも注目しなくてはならないだろう。

ダラスは男性ストリッパーたちのリーダーで、神のような存在だ。実際、髪型など、ダラスの風貌はキリストに似ていないだろうか。キリストだって裸で磔にされたのだ。男の裸には、神性やカリスマ性がこめられている。彼は自分よりも若い男たちを次々にストリッパーとして育て上げようとする男という設定になっているが、これはひょっとするとギリシア時代の少年愛につながるのかという想像も膨らんでいく。そこまで深読みしなくても、年長の男と年下の男の関係を描く映画は、『ハスラー 2』（*The Color of Money*, マーティン・スコセッシ監督・1986）『セント・オブ・ウーマン』（*Sent of a Woman*, マーティン・ブレスト監督・1992）『フェイク』（*Donnie Brasco*, マイク・ニューウェル監督・1997）など、枚挙にいとまがない。アメリカ映画の一つの定番である。

マイクとアダムの関係はどうだろう。二人が親しくなる場面で、橋の上から後ろ向きに川に飛び込むマイク、それにつられて飛び込むアダムの様子が描かれる。この場面でアダムは、明らかに飛ぶこむことが怖そうなのだが、「マイクが飛び降りるんだったら、俺もやってみよう」という気持ちで飛び降りる。「俺たち親友になろう」「ああ」と二人は泳いでいく。二人は同性愛的感情で結ばれたようだ。男二人の友情の物語もアメリカ映画の定番だが、この飛び込む場面は、何よりも『明日に向かって撃て』（*Butch Cassidy and the Sundance Kid*, ジョージ・ロイ・ヒル監督・1969年）のブッチとキャシディを彷彿とさせるだろう。

『マジック・マイク』では、新人のストリッパーであるアダムが徐々にストリッパーとして一人前になっていく様子が、サブプロットとして描かれていくのだが、プロットの組み立ては、アメフトや野球などスポーツを介在させた男同士の絆を描く映画とオーバーラップする。すなわち、ストリップショーに向けて、男たちが団結し、トレーニングに励み、ショーを成功させていく物語と読むこともできる。

アダムにダラスがストリップの特訓をする場面。この場面では、「さあ、脱げ」とダラスに言われ、アダムはちょっと戸惑いながらも半裸になる。その脱ぎ方を見ながら、「小学生の体育か？」とダラス。スタジオには、全身を映す鏡が置かれていて、その鏡を見つめながら、二人は特訓を始める。半裸のアダムの後ろに肌が透けるような薄いシャツ一枚のダラスが身体を寄せていて、背中からアダムの身体をロックしている、アダムのアナルに自分のペニスを触れさせようとしているかのようなポーズにも見える。しかも、身を寄せ合っている二人の姿は鏡にも写っている。彼らは自分たちの身体を見つめながら、美しく見せるためのレッスンをしているのだが、コーチ

が新人をしごくのは、スポーツ映画によくある一コマであり、ダラスの様子は真剣そのものだ。スポーツでは、荒っぽいスキンシップに見せかけて、男が男同士の愛情を表現することがしばしば指摘されることだが、この映画でも、軽いハグ、握手、頭を叩く、強く肩をたたく、首をつかむなど、男同士の愛情表現が随所に出てくる。ラスト近く、ショーが終わって、アダムと抱きしめ合うダラス。ショーの成功の余韻のなかにいる二人は裸のままハグし合い、顔を近づけ、おでこをくっつける。これもスポーツの勝利の場面と重なるだろう。ストリップの世界なので、つい彼らの裸身のエロティシズムにとらわれてしまうが、スポーツ映画の場合も男性同士の裸身の表象が多いことはいうまでもない。『ロッキー』(Rocky, ジョン・G・アビルドセン監督、1976)や『ザ・ファイター』(The Fighter, デビッド・O・ラッセル監督・2010)など、アメリカはボクシングの映画が多いし、アメフトなどを描く映画でも、男たちがシャワーを浴びる場面などで、たっぷり彼らの裸身を堪能できる場面が用意されている。こう見てくると、ストリップはスポーツと同じであり、『マジック・マイク』は、常套的なスポーツ映画と言っても差し支えない。

さらに、何よりも問題にしないのは、女性の視線が描かれないことである。確かに観客の女性たちは、ストリッパーたちの演技を楽しんでいる。しかし、彼女たちにマルヴィイが言うところの視線の担い手という言葉が当てはまるだろうか。彼女たちは、あくまでも気分を高揚させるショーを楽しんでいるに過ぎないように見える。それはミュージカルを見るような楽しさで、性的な気分を高めているという描き方であり、彼らの肉体に視覚的な性欲を彼女たちが催しているような描き方にはなっていない。そもそも、この映画の女性登場人物で、重要なパートを演じる女性はアダムの姉で、後にマイクと親しくなっていくブルック(コディ・ホーン)のみである。彼女も含めて、女性たちの視線には、男が女の裸身に対して示す、見つめる視線の持続性が感じられない。この部分も従来の映画となんら変わっていない。

そして、映画は、ストリップからは足を洗おうと決心したマイクとブルックが結ばれることを暗示して終わっていく。これも、アメリカ映画らしい、月並みな異性愛主義である。

4. 見られる男の時代

こう考えてくると、『マジック・マイク』は表層的には変化があっても、本質的な枠組は、きわめて常套的であると断言できる。したがって、この映画が従来の映画よりも進んでいるのは、男の裸を客体化して見せることに主眼を置くという一点に集約できるように思う。

『マジック・マイク』では、ストリップから離れた、日常を描く場面でも、女性よりも男性が被写体となる。例えば、マイクが最初に画面に登場する場面では、ベッドから起き上がったマイクの姿が映る。彼は裸である。そのまま彼がベッドから起き上がるとパンツもつけていないため、全裸の後ろ姿が移る。次にタオルを腰に巻いた彼が、洗面所の鏡の前に行くのだが、その向こう側におそらく彼と夜をともにした女性が、上半身裸でたっている。しかし、彼女のところには光が射していないため、彼女の乳房ははっきりとは見えない。鮮明に見えるのはマイクの裸身のほうである。どうやら、彼は女性2人と3Pをしていたらしく、ベッドにはもう一人の女性が寝ているのだが、彼女も後ろからのヌードだけで、前面は見えない。マイクとブルックのビーチでの語らいの場面でも、ブルックは胸も薄く、豊満な身体ではないため、ビキニ姿の彼女の肢体より

も、赤いトランクスのマイクの肢体の方が映えてしまう。セクシーな裸身をもつ男性ばかりが登場するこの映画で、女性はセクシーでなく描かれるというのは、伝統的なジェンダーの反転であり、この映画では徹底して見られるのは女よりも男である。

このことは何を意味しているのだろうか。

アダムがマイクに知り合うのは、肉体労働の場である。アメリカは荒野を切り開いてつくられた国であり、原初のアメリカならば、肉体労働はもっとも男性的な仕事だったはずなのだが、今では機械が重労働を肩代わりしてしまったため、エリートの職業とはみなされない。またアダムは、ストリッパーになる前に、携帯会社の面接を受けたが、「ネクタイのせいでやめた」ということになっている。ネクタイ族の男たちが、企業社会に去勢されているということは、ベンショフとグリフィスなども訴えてきたことだが、21世紀になって、エリート職がかっこいいという意識もますます遠のいているのではないか。「俺はやり直せるなら、高校も行かない。絶対に」というダラスの台詞は学歴エリートに魅力がないことを語っている。肉体を駆使する仕事の価値が低められ、一方で企業のサラリーマンも男性性を損なうものでしかないという世相のなかで、男はどこに男のアイデンティティを求めるのか？ 20世紀末の『アメリカン・ビューティー』では、主人公が会社をやめて、ファーストフード店で働きはじめ、家に帰るとシェイプアップに励むという設定になっていたが、『マジック・マイク』は、シェイプアップした体を武器に、ストリッパーとして稼ぐという話である。マイクは30歳のモラトリアム男で、家具の仕事の事業を始める資金を作るためにストリッパーの仕事をしているのだが、ブルックが述懐するように、マイクの計画はさして現実的なものではない。「しかし、したいのならば、しなさい」という彼女の台詞は、他に助言もできないという状況を示唆している。ステージ上での華やかさは裏腹に、日常でのマイクは苦悩している。男のアイデンティティに苦しむ男たちは、男のアイデンティティを肉体美に求め始めてきているように思える。もはや男性は、ストリップのような虚構の世界でしか、男性性を確認することができなくなっているのだ。

したがって、彼らの裸身は男性性の危機を示しているのだが、その一方で、これだけ美しく描かれれば、男性の美の追求が新たな時代の男のアイデンティティとなりえるのかもしれないとも思えてくる。『マジック・マイク』と限らず、21世紀になって、男の裸が性的客体物として描かれるものは、目立って増えている。『ネイバーズ』(Neighbors, ニコラス・ストローラー監督・2014)では、ザック・エフロンがMTVムービー・アワードのベスト・シャツレス賞を獲得した。この映画のラストでは、彼の上半身裸(シャツレス)の姿が、たつぷりと堪能できる。その他、ヒュー・ジャックマン、ダニエル・クレイグなど、たつぷりと裸体を見せてくれる男優も増えているように思える。一方で、女優がセクシーな裸体を見せる場面はほとんど思い浮かばない。表象のされ方やそれに向けられる眼差しの質は違っていても、見られる客体となるのは徐々に女性よりも男性になってきている。

21世紀は見られる男たちの時代になるのではないか、ということを予感させる。その意味で、『マジック・マイク』は現代を象徴する映画の一つと言っていいだろう。

注

『マジック・マイク』のテキストは東宝株式会社(2014)のものを使った。本文中の訳は石田泰

子訳。

引用文献

- 1) ローラ・マルヴィ 斎藤綾子訳「視覚的快楽と物語映画」岩本憲児・武田潔・斎藤綾子編『「新」映画理論集成 I ——歴史・ジェンダー・人種』フィルムアート社 1992年 126-141 頁。
- 2) Peter Lehman. *Running Scared*. Philadelphia: Temple University Press, 1993. 6 頁。
- 3) Steven Cohan. *Masked Men*. Bloomington and Indianapolis: Indiana University Press, 1997. 179 頁。
- 4) 國友万裕『マッチョになりたい!? 世紀末ハリウッド映画の男性イメージ』彩流社 2011 年。
- 5) H・M ベンショフ M・S・グリフィン『映画の中の女と男——アメリカ映画のジェンダー表象』英宝社 2005. 50 頁。
- 6) Richard Dyer. Don't look now: The Male Pinup. *Screen: the journal of the society for education in film and television*, vol.23 no.3-4 London: The Society, 1982. pp.61-73.
- 7) Richard Mayer. Rock Hudson's Body. *Inside/Out*. London and New York: Routledge, 1991. pp259-288.
- 8) 鷺田清一『モードの迷宮』ちくま学芸文庫 2003 11 頁。
- 9) Yvonne Tasker. *Spectacular Bodies*. London and New York: Routledge, 1993. p.80.
- 10) 二村ヒトシ、岡田郁 金田淳子『オトコのカラダはキモチいい』KADOKAWA /メディアファクトリー (Kindle 版) 2015. no.1196-2288.
- 11) マイケル・フロッカー 伊藤あや子訳『メトロセクシャル』ソフトバンク 2004.
- 12) アン・ホランダー 中野香織訳『性とスーツ』白水社 1999. 80 頁。
- 13) 遠藤徹『ポスト・ヒューマン・ボディーーズ』青弓社 1998. 50-51 頁。
- 14) 杉浦由美子『腐女子化する社会』中公新書ラクレ 2006. 96-97 頁。

Gender-Role Development in University Students: Differences Based on Job Seeking Experiences

Emiko KATSURADA
(Kwansei Gakuin University)

This study examines the developmental aspect of gender-role attitudes and gender personality traits (masculinity and femininity) among university students. Since senior students encounter society's gender roles through job seeking experiences, which would influence their gender roles, it is expected that seniors who had the experience of job-seeking would have more traditional gender-role attitudes and more traditional gender-role personality compared to freshmen, sophomores, and juniors who had fewer job-seeking experiences. Also, based on Block's (1973) developmental model of gender role that indicates the association between androgynous personality traits and personal maturity, it is hypothesized that there is more androgyny among seniors.

Four hundred and ninety-eight university students participated in this study, however, due to the imbalance in the number of male and female participants among freshmen and sophomores, female students were randomly selected to make the same number of male students. The final participants used for the data analysis were as follows: 150 freshmen and sophomores (75 males and 75 females) who do not have any job-seeking experiences, 75 juniors (30 males and 35 females) who have some job-seeking experiences, and 105 seniors (55 males and 50 females) who have complete job-seeking experiences such as exams and interviews.

The Scale of Egalitarian Sex Role Attitude (SESRA; Suzuki, 1987) was used to assess their gender-role attitudes and the Japanese Gender Role Index (JGRI; Sugihara and Katsurada, 2002) to assess their gender personality traits. The results indicated that job-seeking experiences had no effect on gender-role attitudes. However, senior male students' masculinity score was significantly higher than other male students although such difference was not found among female students. Participants were classified into four gender-types using the median-split method; Masculine, Feminine, Androgyny, and Undifferentiated, and it was found that there were more Androgyny types in the senior group for both male and female students. Thus, the present result supported the Block's model. The results were discussed in terms of the effect of job-seeking experiences.

大学生の性役割の発達

—就職活動経験の違いを反映して—

桂 田 恵美子
(関西学院大学)

問題と目的

性役割の発達に関する研究は従来幼児期や児童期に焦点が当てられたものが多い。性役割とは特定の文化において男性あるいは女性にふさわしいとされる行動や態度のことである¹⁾。幼児期や児童期は性役割の社会化が起こる時期であり、性役割の発達が顕著に見られる時期であるため、多くの研究がなされてきたのだろう。青年期の性役割に関する研究も多数あるが、発達に焦点をあてた研究は限られている。その限られた研究の一つに伊藤（2001）の性同一性の発達の研究がある²⁾。この研究は中学生、高校性、大学生の女子を対象に性同一性に焦点を当て、その発達を横断的に検討したものである。また、宇井・松井（2002）は、大学生を対象に回顧法により高校生時代と大学生の現在の性役割態度を比較し、その発達の变化を検討している³⁾。しかし、これらの研究では大学生になってからの発達については検討されていない。大学の4年間にいても性役割は変化しているのではないと思われる。なぜなら、大学4年生は特に就職活動を経験し、日本社会の性役割を目の当たりにすることになるからだ。それまでも、アルバイトで社会の性役割を経験することもあるだろう。また、授業や公共のセミナーなどで性役割について勉強する機会もあるだろう。しかし、就職活動を通して触れる日本社会の性役割は、将来の自分自身に直接関わってくることであり、それまで持っていた自身の性役割観などに影響を与える可能性がある。

大学生の就職活動経験の影響については比較的良く研究されており、就職活動を通して自己理解が深まること⁴⁾、自己効力感や自己成長が促進されること^{5) 6)}が報告されている。しかし、これらの研究は性役割の視点を含んでおらず、就職活動を通して個人の性役割が変化するのかを検討した研究はほとんどない。そこで、本研究では大学1年生から4年生を含む横断研究により、特に、就職活動を経験した4年生と経験していない3年生以下の性役割に違いがあるのかを検討した。

性役割に関して柏木（1973）は、性役割行動、性役割、性役割同一性の3側面に分けている⁷⁾。性役割行動とは社会が期待する性役割の実現度であり、性役割観とは性役割に関する自己の価値観であり、性役割同一性とは自分自身をどのくらい男性らしい（女性らしい）と思っているかということであると説明されている。柏木は、青年期の性役割の発達の中心問題は性役割観の形成や性役割同一性の確立であるとし、青年期の性役割観の形成においては、単に社会の性役割期待を受動的に受け入れるのではなく、社会一般の性役割観を受け入れながらも、能動的に自己の性役割に関する価値観を形成していくことが特徴であるとしている。また、社会一般の性役割期待

や自分自身の性役割観に照らして自分がどのくらい男性的・女性的であるかの評価が性役割同一性であるとしている。つまり、まず、自分の性役割観を形成し、それに基づき性役割同一性が確立されるということである。さらに、柏木は性役割行動や性役割の発達には性差があり、女性は性役割の発達において混乱や葛藤があり、性役割同一性の確立には困難をきたすとしている。伊藤（1997）も、女子青年の性の受容の困難さを述べ、その理由は男女の生理的な仕組みの違いと社会における女性の地位の低さであるとしている⁸⁾。

一方、小倉（1982）は、性役割とは柏木のいう「性役割行動」の側面だけであるとし、行動レベルだけでなく意識レベルも含めた「性役割パーソナリティ」とすべきであるとしている⁹⁾。つまり、柏木のいう性役割同一性も性役割行動の意識レベルと考え、性役割パーソナリティに含めている。そして、性役割を「性役割パーソナリティ」「性役割観」「性役割受容性」の三つの側面に分類しており、個人の男性性や女性性の程度の測定具である性度スケールや性役割スケールが測定してきたものは、この「性役割パーソナリティ」であるとしている。本研究では、性役割の側面の中でも、柏木と小倉の共通側面である「性役割観」と「性役割パーソナリティ」を取り上げる。

性役割の発達について、Block（1973）は自我の発達と関連するというモデルを提唱し、自我発達の最高レベルにおいて、男性性と女性性（Block は agency と communion という呼称を使用している）が統合されたアンドロジニーの性役割パーソナリティが確立されると述べている¹⁰⁾。このモデルを支持する実証的研究として、Kohlberg の道徳性テストにおいてより成熟している学生は男性性・女性性共に高いアンドロジニーの自己概念を持っていたという研究結果を挙げている。また、自我の成熟度を示す Loewinger の文章完成法において、自我の成熟度が最高レベルの男子高校生は低レベルの男子に比べて女性性の自己概念が強く、最高レベルの女子高校生はそれ以外の者より男性性の自己概念が強いという研究結果も紹介している。つまり、自我成熟度が高くなるにつれ、男女共にアンドロジニーになると言う。このモデルに従うと、一般的に自我成熟度は年齢と共に上がると考えられるので、大学生 4 年生は 1 年生よりもアンドロジニーが多いと考えられる。

また、上述した柏木（1973）の性役割の発達から、大学生の就職活動経験は彼らの性役割観や性役割パーソナリティに影響を及ぼすと考えられる。そして、その影響は男女で異なっていると考えられる。なぜなら、多くの日本の企業においては初職から大きな性分離が存在するからである¹¹⁾。この性分離とは、職種や給料、会社の投資である入社後の訓練において明白な男女差があるということである。実際、労働政策研究・研修機構の報告書によると、企業内訓練において、男性には将来のステップアップを視野に入れた訓練が行われ、女性には基礎的な知識の習得のための研修が多い¹²⁾。このような職種や給料、企業内訓練の男女差について、男女大学生は就職活動の段階で目の当たりにすることになる。田中（1996）は、女性を職業領域から排除する障壁は、「男は仕事、女は家庭」という社会一般の性役割観だけでなく、その内側に女性のフルタイムの長期的キャリアを阻止する第 2 の障壁があると述べている¹²⁾。その為、女性のパートタイムや短期キャリアの職業領域への参加は比較的容易になったが、フルタイムの長期的キャリアに入るのは依然として難しいままであると言う。つまり、男女雇用機会均等法が出来たとはいえ、女性を男性と同様に長期的に雇用しようとする企業がまだまだ少ないと言うことであり、女子学生は就

職活動を通してこの第2の障壁の存在を実感するであろう。そのような経験は、女子大学生にとっては自分の将来を真剣に考える機会を与え、彼女らの性役割にも少なからず影響を与えるものと考えられる。一方、男子学生にとっては、そのような障壁はないが、就職後期待される役割は明確であり、その男性役割を担う覚悟を迫られることになる。このように、就職活動は性役割の観点からは男子学生と女子学生にとっては全く異なった経験であると言える。同じ就職活動ではあるが、性役割に関しては全く異なった経験であるために、柏木（1973）や伊藤（1997）の言う性差が促進されると思われる。男性の場合、就職活動を通して企業の性分離を目の当たりにし、卒業後、性分離の明らかな社会・企業に入っていく身としては、その現実を受け入れるしかなく、就職活動経験は性役割観や性役割パーソナリティをより伝統的な方向へと動かすのではないと思われる。一方、女性の場合は、女性職業人としての制約・障壁（田中，1996）を実感し、それを素直に受け入れる者もいれば、より大いなる葛藤をもつ者もいるというように、個人差が大きいのではないと思われる。

以上のことから、本研究では、以下の2つの仮説を検証した。Blockのモデルより、「大学4年生は1年生よりもアンドロジニーが多い」（仮説1）。就職活動の男女の経験の違いより、「就職活動を経験した4年男子大学生の性役割観や性役割パーソナリティは就職活動を経験していない学生（1～3年生）に比べて伝統的である。一方、女子の場合、上述した葛藤の程度の個人差が大きいために、就職活動を経験した4年生も就職活動を経験していない学生（1～3年生）と変わりがない、つまり、学年差というよりも個人差である」（仮説2）。

方 法

対象者：関西の私立大学の1年から4年までの学生503名が本研究の調査に参加した。その内5名の留学生は対象から除外した。本調査の参加者は、男子大学生160名、女子大学生338名、合計498名であった。彼らの平均年齢は20.03歳で、年齢範囲は18歳から27歳であった。データ収集期間は2009年9月下旬から11月中旬までであり、最初文学部でのデータ収集を行ったが、男子学生の人数が少なかったため、経済学部、法学部、商学部の男子学生に協力してもらった。指標：測定した指標は、年齢、性、学年の他に、学生の就職活動状況、性役割観と性役割パーソナリティであった。

就職活動状況については、その程度を表す3つの選択肢を提示し、自分の状況に当てはまるものを一つ選んでもらった。3つの選択肢とは、1. 就職に関して全く何もしていない、2. 資料集めなどの企業研究や入社試験のための対策勉強をした、3. 入社試験や面接試験を受けた、であった。

性役割観については、鈴木（1987）の平等主義的性役割態度スケールを使用した¹⁴⁾。このスケールは40項目から成るが、本研究においては、鈴木（1987）の因子分析において第1因子の負荷量が.50以上の17項目を使用した。この得点が高いほど平等主義的性役割態度を有することを示す。本研究における17項目の α 係数は.87であった。

性役割パーソナリティの測定には、Japanese Gender Role Index (JGRI; Sugihara & Katsurada, 2002)を使用した¹⁵⁾。JGRIは日本におけるBem Sex Role Inventory (BSRI)に相当する性役割スケールを作るべく、Bem（1974）がBSRIを作成した手順¹⁶⁾に従い作成された（JGRIの作成手順の

詳細、信頼性・妥当性については Sugihara & Katsurada (2002) を参照)。JGRI は男性性特性・女性性特性が各 10 項目と中間性項目 10 項目の合計 30 項目から成る。男性性特性としては、「リーダーシップをとる能力がある」「意志が強い」「行動力がある」などで、女性性特性は「しとやか」「かわいい」「よく気がつく」などである。得点が高いほど、その特性を有していることを示す。本研究における男性性・女性性項目の信頼性はそれぞれ $\alpha_s = .81, .89$ であった。

結 果

対象となった大学生の人数の内訳を Table 1 に示した。男女共に 1・2 年生は全員就職活動を何もしない就職活動未経験者であり、3 年生は全員何らかの就職活動をした初期就職活動経験者で、4 年生は全員入社試験や面接試験を経験した就職活動経験者であった (Table 1 参照)。

Table1 男女の学年別就職活動経験別の人数と平均年齢

	学年	就活未経験	初期就活群	就活経験群	平均年齢
男性	1	39	0	0	18.8
	2	36	0	0	19.9
	3	0	30	0	20.6
	4	0	0	55	22.0
	合計	75	30	55	
女性	1	128	0	0	18.5
	2	106	0	0	19.7
	3	0	54	0	20.8
	4	0	0	50	21.8
	合計	234	54	50	

Table 1 から明らかなように、4 年生は男女ほぼ同数であったが、1・2 年生では女性の人数が男性に比べて圧倒的に多く、3 年生では女性がやや多いという状況で、男女の就職活動段階の分布に大きな偏りが見られた。本研究では、男女の比較検討を行うことを目的としているため、各学年の男女学生数が同じになるように、1 年から 3 年生の女性対象者を無作為に削除した。最終的に分析の対象となったのは、Table 2 に示す通りである。尚、本サンプルの対象者の平均年齢

Table 2 分析対象となった男女別就職活動状況の人数 (%)

	男性	女性
就活経験無 (1・2 年生)	75 (46.9)	75 (46.9)
初期就活経験有 (3 年生)	30 (18.8)	35 (21.9)
就活経験有 (4 年生)	55 (34.4)	50 (31.2)
	160 (100)	160 (100)

$$\chi^2 (2, N=320) = .62, ns$$

は20.45歳（範囲18～27歳）で、有意な男女の年齢差はなかった^{注1)}。また、本サンプルでは、学年と就職活動状況がきれいに重なっており、本研究は就職活動経験に焦点を当てているので、1年生と2年生は一緒にし、学年は、就職経験の無い1・2年生、初期の就職活動経験有りの3年生、入社試験や面接試験の経験有りの4年生の3分類で分析をおこなった。

まず、平等主義的性役割態度において学年別の差異があるのかを見るために、平等主義的性役割態度合計得点を従属変数とし、性別と学年を要因、年齢を共変量とした2要因の共分散分析をおこなった。その結果、性別の主効果（ $F(1,298)=37.26, p<.001$ ）のみ有意であった。Table 3に男女別平等主義的性役割態度合計得点の平均値と標準偏差値（SD）を示した。Table 3からもわかるように、女子学生の方が男子学生よりも平等主義的性役割態度得点有意に高く、より平等的性役割観を持っていた。

Table 3 男女別の性役割観得点、男性性・女性性得点の平均値（SD）

	男性	女性
平等主義的性役割態度得点	56.40 (.77)	62.30 (.74)
JGRI 男性性得点	39.28 (.88)	35.42 (.83)
JGRI 女性性得点	40.90 (.84)	36.86 (.79)

次に、性役割パーソナリティにおける学年別の差を調べるために、JGRIの男性性・女性性得点をそれぞれ従属変数とし、性別と学年を要因とし、年齢を共変量とした2要因の共分散分析をおこなった。その結果、男性性得点においては、性別、学年の主効果、性別と学年の交互作用が有意であった。性別は $F(1,300)=10.39, p<.01$ 、学年別は $F(2,300)=6.00, p<.01$ 、交互作用は $F(2,300)=4.95, p<.01$ であった。しかし、女性性得点においては、性別の主効果のみが有意であった（ $F(1,300)=12.55, p<.001$ ）。男性性・女性性の性別による平均値と標準偏差値（SD）をTable 3に示した。

男性性得点において有意な交互作用が見られたので、男女別に年齢を共変量とし、学年を要因とする一要因の共分散分析を行なった。その結果、男子学生においては学年の有意な主効果が見られたが（ $F(2,148)=7.92, p<.01$ ）、女子学生においては学年の主効果は有意ではなかった。学年別の男性性・女性性得点の男女別平均値と標準偏差値（SD）をTable 4に示した。

Table 4 男女大学生の学年別男性性・女性性得点の平均値（SD）

	男性性得点		女性性得点	
	男性	女性	男性	女性
1・2年生	34.23 (1.68) ^a	34.43 (1.57)	39.51 (1.61)	34.41 (1.53)
3年生	37.39 (2.05) ^a	35.31 (1.53)	41.22 (1.95)	37.02 (1.51)
4年生	46.55 (2.11) ^b	36.00 (1.83)	42.11 (1.91)	39.33 (1.79)

注) a と b は 5% 水準で有意差があることを示す。

更に、JGRIの男性性・女性性得点の中央値折半法により、対象者を4つのジェンダータイプに分類し、学年とのクロス集計をおこなった。尚、中央値は本サンプルの中央値；男性性＝36、女性性＝38を用いた。4つのジェンダータイプとは、男性性得点が中央値以上で女性性得点

が中央値未満の男性性優位型、女性性得点が中央値以上で男性性得点が中央値未満の女性性優位型、男性性・女性性得点共に中央値以上のアンドロジニー型、男性性・女性性得点共に中央値未満の未分化型である。カイ 2 乗検定の結果は男女共に有意であった。Table 5・6 に示されるように、男女共に 4 年生においてアンドロジニー型の割合が多いことが分かった。特に男子学生においては、4 年生の 76.5% がアンドロジニーであり（調整済み残差 4.6）、未分化型は 9.8% であった（調整済み残差 -3.5）。一方、1・2 年生はアンドロジニー型（37.1%、調整済み残差 -3.9）と未分化型（37.1%、調整済み残差 3.9）の割合は差がなかった（Table 5 参照）。女子学生においては、1・2 年生の 50%（調整済み残差 2.6）が未分化型であり、アンドロジニー型は 22.1%（調整済み残差 -2.9）であったが、4 年生ではその割合が逆転し、アンドロジニー型は 42%（調整済み残差 2.0）であり、未分化型は 20%（調整済み残差 -2.1）であった（Table 6 参照）。

Table 5 男子学生の学年別ジェンダータイプの分布（%）

	未分化型	男性型	女性型	アンドロジニー
1・2 年生	26 (37.1)	7 (10.0)	11 (15.7)	26 (37.1)
3 年生	6 (21.4)	4 (14.3)	5 (17.9)	13 (46.4)
4 年生	5 (9.8)	4 (5.9)	3 (5.9)	39 (76.5)

$$\chi^2 (6, N=149) = 26.68, p < .01$$

注) 男性型 = 男性性優位型、女性型 = 女性性優位型

Table 6 女子学生の学年別ジェンダータイプの分布（%）

	未分化型	男性型	女性型	アンドロジニー
1・2 年生	34 (50.0)	10 (13.5)	9 (13.2)	15 (22.1)
3 年生	11 (32.4)	7 (20.6)	3 (8.8)	13 (38.2)
4 年生	10 (20.0)	9 (18.0)	10 (20.0)	21 (42.0)

$$\chi^2 (6, N=152) = 13.76, p < .05$$

注) 男性型 = 男性性優位型、女性型 = 女性性優位型

考 察

大学生は就職活動を通して社会の性分離を目の当たりにすることから、また、そのことから受ける影響は男女で異なることから、大学の 4 年間に於いて男女で異なった性役割の発達があるのではないかと考え、大学 1 年生から 4 年生の性役割を検討した。具体的には、性役割の中でも、性役割観と性役割同一性(アイデンティティ)を内包した性役割パーソナリティの側面に注目し、就職活動経験を反映した学年の違いによる差異があるのかどうかを調査した。

性役割観においては、男子学生よりも女子学生の方がより平等的性役割観を持っているという性別による差異が見られただけで、学年による差異は見られなかった。女子学生の方が男子学生よりも平等的性役割観を持っているという本研究の結果は、性役割態度を調べた結果はどの国においても女性の方が男性よりも平等志向的であるという鈴木（1987）の報告と一致する¹⁴⁾。鈴木

は、この性差について、女性の方が社会において機会や資源の分配で不利益を被っているので、個人の不平等に意識が向けられる傾向が強くなるためであると説明している。本研究の結果も、現代の日本社会において未だに女性が不利益を被っていることを表している。

また、女子学生の方が男子学生よりも平等的性役割観を持っているという本研究の結果は、社会の性分離や企業側の女性に対する壁を目の当たりにする就職活動が、女性にとってより大きな葛藤経験であることを示唆している。そうしたことから、本研究では就職活動経験は個人の性役割観に男女別々の影響があるのではないかと考えたが、男女共に就職活動経験を反映した学年別の差はなかったので、就職活動自体は個人の性役割に関する価値観にそれほどのインパクトは無いという結果であった。個人の価値観までに影響を及ぼすには単に社会の性分離を目の当たりにするだけでは不十分で、実際に就職し、社会における性分離を直に経験し、個人の人生に直接関わってくることによって性役割に関する価値観も変わってくるのかもしれない。今後、これらの学生を追跡調査し、実際に社会人としての経験を積んだ後に、彼らの性役割観が変化しているのかどうかを見ることは大変興味深いことだと思われる。

性役割パーソナリティにおいては、リーダーシップをとる能力がある、意志が強い、行動力があるなどの男性性において男子の学年差が見られ、就職活動経験者である4年生の男性性得点が全く就職活動をしていない1・2年生や何らかの就職活動をした3年生よりも有意に高得点であった。これらの結果から、本研究で設定した仮説2は性役割パーソナリティにおいてのみ支持されたとと言える。

Table 3 からわかるように本研究においては、かわいい、よく気がつく、子ども好きなどに代表される女性性は男子学生の方が女子学生よりも高く、これは先行研究の結果とは異なったものである。Bem Sex Role Inventory を使って日本の大学生を調査した先行研究では、女性性得点において男女差は見られず、男子学生の方が高いとはなっていない¹⁷⁾。また、JGRI を使った日本人成人(18~80歳)を対象とした先行研究でも、女性性得点では性差は見られなかった¹⁵⁾。Sugihara らは、性役割パーソナリティにおいて性差が縮んできているのはアメリカでも同様であるとしながらも、日本での女性の高学歴化・社会進出化が女性の男性性を高め、父親不在の家庭で育つ男性の女性性を高めている結果、性差が縮んだのではないかと考察している。本研究の男子大学生の女性性が女子よりも高かったという結果は、その後日本人男性の女性性は高まり続けていることを示しているのかもしれない。近年、「草食系男子」などという言葉も出てきており、男性の男らしさの欠如が指摘されているが¹⁸⁾、男性の女性性の高まりが男らしさの欠如として現れているのではなかと思われる。あるいは、本研究の結果は、関西の一私立大学のみでのデータ収集であったため、本サンプルの特徴を表しているのかもしれない。

このサンプル内で見える限り、就活経験無しの大学1・2年生の男子学生は男性性よりも女性性得点の方が高く、就職を意識し就職活動を少し始めた3年生でもまだ女性性の方が高く、会社説明会への参加、入社試験や面接などの就職活動を経験した4年生において初めて、男性性の方が女性性よりも高くなっている(Table 4 参照)。つまり、大学の低学年においては、男性性が低く、どちらかと言うとパーソナリティ的には女性的であった男子学生は、実際の就職活動を通して男性性が飛躍的に高まったと考えられる。先述したように、男子大学生は就職活動によって社会の性分離に直面し、ビジネス社会においてリーダーシップや行動力などの男性性特性が求められて

いることを目の当たりにし、その社会へ入っていく者として自分の中にある男性性を発現していくのであろう。

一方、女子学生の場合は、就職活動は性役割パーソナリティ（男性性・女性性）には何ら影響がなかった。男性性も女性性も学年と共に高くなっているが、男子学生のように4年で急激に男性性あるいは女性性が高くなるというようなことはなかった。社会の性分離を目の当たりにした女子学生はビジネス社会で要求される男性性を理解しながらも、女性に対する第2の障壁も目の当たりにし、自分の中にある男性性を素直に発現できないのではないかと考える。吉原（1995）は女性の職業選択には仕事という公的な領域だけの問題ではなく、結婚などの私的領域の問題も含まれてくると言う¹⁹⁾。つまり、女性の職業選択は単に職業の選択ではなく、そこには自己アイデンティティとジェンダー・アイデンティティの葛藤が存在することを指摘している。そして、就職活動の過程において、女性は様々な折り合いをつけて職業選択をしていると言う。また、この葛藤は就職活動期を迎えていない大学1・2年生においても生じていると言う。このように、女子学生にとって就職活動は男子学生とは全く違った経験であり、吉原（1995）のいう折り合いのつけ方も女子学生内で様ではない。さらに、実際に就職活動を始める前から葛藤が始まっていることを考えると、本研究において、女子学生の性役割観や性役割パーソナリティには就職活動段階を反映した学年差が全く見られなかったことは理解できる。

ジェンダータイプで見ると、男女共に就職活動経験者である4年生のアンドロジニー型（男性性と女性性が共に高い）の割合が就職活動未経験者である1・2年生よりも高かった。Block（1976）は自我発達の最高レベルにおいて、男性性と女性性が統合されたアンドロジニーの性役割パーソナリティが確立されるという性役割の発達モデルを示している。本研究の結果は大学4年間の短い間だけでも、学生はアンドロジニーへの発達を示し、Blockのモデルを支持した。ゆえに、仮説1は支持された。しかし、4年生のアンドロジニー型の割合は男性の方が圧倒的に多いという結果から、就職活動を経験したことによる性役割の発達という点では、男性だけにおいて支持されたということになる。大学生の就職活動経験に関しては、自己理解や自己成長に貢献しているという研究結果が報告されているが、そこでは性差は言及されていない²⁰⁾。しかし、就職活動を性役割の観点から見ると、性差は明確であり、就職活動経験が男子学生と女子学生では違うものであることを示唆している。

最後に本研究の限界と今後の課題を述べる。先にも触れたが、本研究のサンプルは関西の一私立大学の大学生であり、男子学生は様々な学部出身であるが全て文系であり、女子学生に関しては、文学部の女子学生がほとんどであるため、得られた結果は日本の男子・女子大学生に汎化できるものではないだろう。今後、様々な大学の学生を対象とし、特に理系の男子・女子学生を含めた追試が必要であろう。また、4年生全員が面接などの就職活動を経験し、3年生は就職活動を少し始めた者、1・2年生は全く就職活動をしていないといったように、学年と就職活動状況とが一致していたために、示された効果が純粋に就職活動経験によるものとは言えないという限界もある。純粋に就職活動経験の効果を見るためには、4年生のみを対象として、就職活動前後で性役割の指標の変化を調査するという縦断研究が必要であろう。先述したように、就職活動は社会の性分離を目の当たりにするにすぎず、個人の性役割に影響を与える程ではないのかもしれない。今後は、実際に就職した後の性役割が学生時代とは違っているのか等を検討する必要がある。

ると思われる。

注1) もともとのデータにおいても、主な結果は変わらなかった。

引用文献

- 1) Golombok, S., & Fivush, R. Gender development, Cambridge University Press, Cambridge, U.K., 1994.
- 2) 伊藤裕子「青年期女子の性同一性の発達—自尊感情、身体満足度との関連から—」日本教育心理学会編『教育心理学研究』49巻、2001、458-468頁。
- 3) 宇井美代子・松井豊(2002)。「青年期後期における性役割態度の発達」、筑波大学心理学部編『筑波大学心理学研究』24巻、2002、171-184頁。
- 4) 梅村祐子・金井篤子「就職活動における理想と現実の統合過程に関する探索的研究—理想自己と現実自己・現実状況の関連から—」経営行動科学学会編『経営行動科学』19巻、2006、151-162頁。
- 5) 浦上昌則「就職活動を通しての自己成長—女子短大生の場合—」日本教育心理学会編『教育心理学研究』44巻、1996、400-409頁。
- 6) 市川彩「就職活動の心理学的意義に関する研究—就職不決断が及ぼす影響の観点から—」名古屋大学大学院教育発達科学研究科編『名古屋大学大学院教育発達科学研究科紀要心理発達科学』52巻、2005、260-261頁。
- 7) 柏木恵子「現代青年の性役割の習得」『現代青年心理学講座第5巻』金子書房、1973、101-139頁。
- 8) 伊藤裕子『青年期における性役割観の形成』風間書房、1997。
- 9) 小倉千加子「性役割行動の発達」東清和・小倉千加子著『性差の発達心理』大日本図書、1982、155-214頁。
- 10) Block, J. H. Conceptions of sex role: Some cross-cultural and longitudinal perspectives, *American Psychologist*, Vol.28, No. 6, 1973, pp. 512-526.
- 11) Brinton, M.C. Women and the economic miracle: Gender and work in postwar Japan, University of California Press, Los Angeles, 1993.
- 12) 独立行政法人労働政策研究・研修機構、労働政策研究報告書 No.152「働き方と職業能力・キャリア形成—第2回働くことと学ぶことについての調査結果より—」。
- 13) 田中重人「戦後日本における性別分業の動態—女性の職場進出と二重の障壁—」日本家族社会学会編『家族社会学研究』8巻、1996、151-161頁。
- 14) 鈴木淳子「フェミニズム・スケールの作成と信頼性・妥当性の検討」日本社会心理学会編『社会心理学研究』2巻、1987、45-54頁。
- 15) Sugihara, Y., & Katsurada, E. Gender role development in Japanese culture: Diminishing gender role differences in a contemporary society, *Sex Roles*, Vol. 47, No.5-6, 2002, pp. 443-452.
- 16) Bem, S. L. The measure of psychological androgyny. *Journal of Clinical and Consulting Psychology*, Vol. 42, No.2, 1974, pp. 155-162.

- 17) Sugihara, Y., & Katsurada, E. Gender-role personality traits in Japanese culture, *Psychology of Women Quarterly*, Vol. 24, No. 4, 2000, pp. 309-318.
- 18) 深澤真紀『草食男子世代—平成男子図鑑—』光文社、2009。
- 19) 吉原恵子「女子大学生における職業選択のメカニズム—女性内分化の要因としての女性性—」日本教育社会学会編『教育社会学研究』57 集、1995、107-124 頁。
- 20) 木谷光宏（2003）。「大学生の就職活動と企業の採用動向に関する一考察—就職自由化時代の就職・採用活動の実態—」明治大学社会科学研究所編『明治大学社会科学研究所紀要』42 巻、2003、117-156 頁。

「フランスに学ぶ男女共同の子育てと少子化抑止政策」

富士谷あつ子・伊藤公雄編著

明石書店 2014年7月

山本 厚子（ノンフィクション・ライター日本ジェンダー学会理事）

本書は、各分野で活躍する11名の執筆者、2名の編著者がまとめたものである。さらに、フランス人と結婚した日本女性たちへの「フランスの子育て」というインタビューも加え、当該テーマが容易に理解されるように工夫されている。

第1章で「日本の子育て、少子化の問題」を展開し、第2章でフランスにおける少子化を克服する方法として、「家族政策、労働政策、家庭内での男女平等の子育について」明らかにしている。そして、第3章で、「フランスから何を学ぶか」という構成になっている。全体を通して執筆者が多いために、記述に重複している部分があるのが、少々気になる。

まず、日本国内の子育て支援と少子化についてみると、過去34年間、「少子化率が上昇している」という数字が明らかなように歯止めがかからない状態である。子育て支援や、女性の就業への支援も十分でなかったり、また、男性の育児休暇など問題は山積みである。

「ジェンダー（社会的、文化的性差）平等」という基本理念を新ためて考えてみる必要性を痛感させられる。日本国憲法では、第14条で「法の下での平等」が規定され、男女差別が禁止されている。そして、第24条で「家族生活における個人の尊厳と両性の平等」が明記されている。

国際的に「男女共同参画」の考えは、1975年、国連が国際婦人年を定め、「平等、発展、平和」をテーマに133ヶ国の政府代表者、国連機関、NGOの代表者など1000名を超える参加者が、「メキシコ宣言」を採択した時から大きく展開し始めたと言える。

これを受け、日本政府は1985年に「男女雇用機会均等法」を制定し、1999年には、「男女共同参画社会基本法」を制定した。

本書では、日本国内では「家族」の概念が変化しており、同時に少子化が、「働き方の男女の格差の問題」と絡み合っていることを明らかにしている。特に、「マタハラ（マタニティ・ハラシメント）」という問題が浮き彫りにされ、女性が生産する社会環境下でないし、男性の育児についても、法制度があっても、家庭、職場、地域の人びとの意識が低ければ実現されないという現状を突き付けている。

それではフランスではどうかと言うと、GDP（国内総生産）の4～6パーセントを家族支援に割り当てているお国柄であり、EU（欧州連合体）域内で北欧諸国に次いで手厚い対策を講じている。政府の家族政策に助言を与える「家族高等評議会」という機関があり、また家族の利益を代弁する「全国家族協会連合」も結成されている。その政策は多様で、金銭の支給、サービス、税制などに分類され、目標の重要性は年代と共に変化していった。

そして、「男女平等とワークバランス」が大きな問題とされてきた。この状況はフランスのみならず、EUの大半の国に当てはまることであった。そこで、90年代後半、EUは全域で女性の就業を優先課題とする「欧州雇用戦略」を採択した。持続可能な経済成長、雇用の量的・質的改

善に加えて社会的連帯の一層の強化を戦略の目標に掲げた。

2014 年、フランス国民議会は「男女（現実的）平等法」を採択した。政府は、20 年ぶりに「女性権利省」を設置した。そして、女性権利大臣は「紙上の平等から現実の平等へ移行するため」と、この法律を説明している。フランス政府の「男女平等」の強い意識が示されている。男女平等をまず数で表すような、「男女のカップル」で実施された地方選挙の様子は、日本国内の TV 番組で取り上げられ、我われ日本人を驚かせた。

EU は、リトアニアの首都に「欧州男女平等研究所」を設置し、EU 加盟国（28 ケ国）の男女平等支援のための情報収集、その分析等の業務に取り組んでいる。この研究所はフランス政府との連携にも一役買っているという。

日本がフランスから学ぶことは多いが、しかし、フランス国内での子育て、家庭内の家事の平等、男女の意識など、すべてが羨ましい状況とは言い難いだろう。それは、実際に体験している主婦のインタビューの話からも察知される。しかし、EU の中でリーダー格であるフランス政府の取り組み方、人びとの意識改革には大いに学ぶべきところがある。ジェンダー教育やテレビでの規制など、日本国内で議論すべき項目は多い。

日本がアジア地域の連帯を構築するように努力し、リーダーになる意識を持ち、国民のひとりひとりが「ジェンダー平等」の理念を現実的なこととして、今、考える必要性に迫られている。また、国連やその他の国際機関から勧告を受けるような社会状況は、一日本女性として恥ずかしい。

本書は、個人個人が身の回りの諸問題を絞って考え・議論し、また日本政府の該当政策を確認する時、さらに、グローバル時代の世界の「ジェンダー平等」の動きを知るために、非常にタイムリーな一冊と言える。

望月紀子『ダーチャと日本の強制収容所』

白水社 2015年3月

伊 藤 公 雄
(京都大学)

ダーチャ・マライーニという名前から、読者は何を連想するだろう。イタリアのフェミニスト女性作家であり『不安の季節』や『シチーリアの雅歌』の著者としてのダーチャだろうか。あるいは、日本でもよく知られる作家アルベルト・モラヴィアの「妻であり娘」でもあったダーチャだろうか。演劇に詳しい人は彼女の代表作で、女性作家にしか書けないとさえ思われる鮮烈な戯曲『メアリー・スチャート』の日本での上演を思い出す人もいるだろう。

そしてイタリアのことをよく知る日本人読者は、ダーチャの父、フォスコ・マライーニ（1912－2004）の名前を想起するかもしれない。著名なアイヌ研究家として知られ、日独伊三国同盟の締結にともない創設された京都帝国大学文学部イタリア語イタリア文学講座の最初の外国人講師となり、その後、イタリアのフィレンツェ大学教育学部で日本語・日本文化講座を開設し、日伊文化交流の立役者だったフォスコ・マライーニのことである。

評者は、かなり以前にダーチャの父親であるフォスコについての論及も含めた論文「『戦時下日本人の対欧米人観—在日イタリア人を中心に』（1986年、中久郎編の報告書『戦時下日本社会における民族問題の研究』所収）を書いたことがある。イタリアは当初はドイツとともに日本の同盟国であった。しかし、1943年ムッソリーニの首相解任とともにイタリア王国は三国枢軸から離脱、ムッソリーニ率いるイタリア社会共和国の設立とともに二つの国が並立することになる。その結果、当時日本に在住していたイタリア人は、親ファシストか反ないし非ファシストかに応じて、日本政府の対応が変化することになる。

反ファシズムの立場を鮮明にしたマライーニ一家は、名古屋市天白にあるイタリア人非戦闘員強制収容所に収容され、その後、拳母（^{こころも}現在の豊田市）にある古寺広済寺に移住する。その後、日本の敗戦までの間、囚われの身におかれるのである。

本書は、こうしたマライーニ一家の日本での生活を、ダーチャ・マライーニの作品を日本に紹介し続けてきた望月紀子さんが、特に、ダーチャの母であるトパーツィア（望月さんが最近ダーチャにあったときは、100歳を超えて未だに元気だったという）の日記を軸に描いたものである。

2歳になるダーチャをともなつて、マライーニ一家が最初に赴任したのは、北海道であった。まさに第二次大戦開始直後に、この一家は、いわゆる「宮沢レーン事件」（国家秘密法によるアメリカ人教師レーン夫妻と北大生の宮沢弘幸氏の事件は、本書にもふれられているように上田誠吉氏による著作が出されている）で逮捕投獄された人々とも深い関わりがあったという。

1941年にフォスコは、京都帝国大学の外国人教師として京都に移住（その間にダーチャには二人の妹が生まれている）した。1943年には、先述のように、マライーニ一家は、それまでの「同盟国人」の身分から「敵国人」として非戦闘員強制収容所に拘束されることになるのだ。収容所

生活は、食料も不十分であり、非人間的な扱いも横行する残忍なものであったようだ。

特に、男性看守たちの、「敵国人」となった子どもを含む女性たちへのまなざしは、あきれるほど残酷なものだった。著者は、トパーツィアの日記を引きつつ、子どもたちも一緒に強制収容所入りが決められたときの警官たちの言葉を、こう書き留めている。

「死んだってどうってことはない、女ばかりだから」(123 頁)

また、マライーニの行動としてよく知られるフォスコの「抗議の指切り」事件（「お前たちイタリア人は嘘つきだ、裏切り者だ」という看守に対して、斧で小指を切って抗議した事件）も、これまで知られていたフォスコ自身の観点（彼の日本論『Ore Giapponesi = 日本の時間、1959 年』）からではなく、本書では、妻のトパーツィアのノートからの記述によって描かれている。

「10 時 15 分ごろ、粕谷がまた尋問に来た。するとフォスコは斧を取りあげて、薪割りをしていた角材の上で左手の小指を切り落とし、それを恐怖につかれた粕谷に突き出して叫んだのだ。『イタリア人、ウソツキデハナイ』、恐ろしい光景にみな茫然となった」(168 頁)。

何よりも本書のひとつの大きな問題提起は、ダーチャのフェミニズム思想とそのフェミニストとしての行動、さらには作家活動の背景に、日本での収容所体験が深く関係しているという示唆だろう。また、彼女の思想と行動の根源に、母であるトパーツィアの思想と行動が重ねられ描かれていることも興味深い（芸術家であったトパーツィアの生き方そのものが、この時代には例外的に明確な主体性を持ち続けた女性として描かれている点も本書のポイントだろう）。親ファシストを偽装する（同盟国人として日本で暮らす）こともできたはずのマライーニ家は、「反ファシズム宣言」をすることで強制収容所送りになったわけだが、「アルプス歩兵旅団兵士のゆえに王に逆らえない」（王への忠誠ゆえの反・非ファシズム宣言）というフォスコに対して、トパーツィアは、明確に「私は夫に従うために強制収容所に行ったのではない」「ナチス・ファシズムは私の思想と相いれない」と、より思想的立場を鮮明にしつつ行動しているのである（121 頁）。

ダーチャの思想の根本を、最初の作品である『バカンス』を参照しつつ、著者はこうまとめている。「人の自由を奪って閉じ込める牢獄の存在とそれからの解放、そして女性に加えられる男の暴力」（の撤廃の要求）こそが、ダーチャの作品の根本にあるものだ、と。(232 頁)。ダーチャが書き続ける「牢獄と男の暴力からの解放」のテーマの背景には、母の思想の継承とともに、日本での強制収容所での原体験が明らかに存在しているのだろう。

1970 年代のイタリアフェミニズム運動の渦中で、「デモの先頭に立ち、抑圧されている女性たち、社会の枠の外にある女性たち、声をあげる力のない女性たちの代弁者となって声をあげ」た（236 頁）ダーチャの詩の一部を、本書から引用してこの書評を終えようと思う。

ひとりの人間であらうとするならば
すぐに始めなければならない
苦しくも喜ばしいたたかいを
男たちとのたたかいではない
あなた自身とのたたかいを
（「わたしの女たち」、第二詩集『わたしの女たち』より）

日本ジェンダー学会会則

1997 年 9 月 13 日 制 定
2012 年 9 月 8 日 一部改正

第 1 章 総 則

- 第 1 条 本会は、「日本ジェンダー学会」と称する。
- 第 2 条 本会の事務所は、理事会がこれを決定する。

第 2 章 目的と事業

- 第 3 条 本会は、男女平等観に基づき、人間らしい生活の実現をめざして、学際的・国際的なジェンダー研究を行い、もって男女の社会的状況の改善に資することを目的とする。
- 第 4 条 本会は、前条の目的を達成するために、調査・研究等の実施、シンポジウム・講演会・講座などの開催、刊行物などの発行、ネットワークの運営、諸機関・団体への助言などの事業を行う。

第 3 章 会 員

- 第 5 条 本会は、正会員および準会員をもって構成される。
 - 2 正会員は、ジェンダーに関する研究及び活動の経験を有するものとする。
 - 3 準会員は、学生などでジェンダーに関する研究及び経験を有するものとする。
- 第 6 条 正会員または準会員となろうとするものは、入会申込書を提出し、常務理事会の承認を得なければならない。
 - 2 常務理事会は前項の承認について、次の総会においてこれを報告するものとする。
- 第 7 条 会員の資格の変更は、入会の手続に準ずる。
- 第 8 条 次の各号に定める会員は、それぞれ年会費として当該各号に定める額を、毎会計年度の当初に納入しなければならない。
 - 一 正会員 10,000 円
 - 二 準会員 5,000 円
- 第 9 条 会員は本会の主催する企画やネットワークに参加し、または本会の刊行物を受け取ることができる。
- 第 10 条 会員は、次の各号の一に該当する場合においては、その資格を失う。
 - 一 退 会
 - 二 死 亡
 - 三 除 名
- 第 11 条 会員で退会しようとするものは、常務理事会に退会届を提出しなければならない。
- 第 12 条 会長は、会員が次の各号の一に該当する場合においては、理事会の議決を経てこれ

を除名することができる。

- 一 会費を継続して3年以上滞納したとき。
- 二 本会の名誉を傷つけ、または本会の目的に反する行為があったとき。

第4章 役員等

第13条 本会に次に掲げる役員を置く。

- 一 会 長 1名
- 二 副 会 長 2名
- 三 理 事 20名以内（会長、副会長、常務理事を含む）
- 四 常務理事 12名以内
- 五 監 事 2名

第14条 理事及び監事は、総会で正会員の中から選任する。準会員の代表者を理事に加えることもできる。

- 2 会長は、理事会が理事の中から指名し、総会の承認を経るものとする。
- 3 副会長は、会長が理事の中から指名し、総会の承認を経るものとする。
- 4 常務理事は、理事の互選により選任する。
- 5 理事及び監事が、相互に兼ねることはできない。

第14条の2 理事会の推薦によって名誉会員をもうけることができる。名誉会員は理事会の諮問を受けて理事会に意見を述べることができる。ただし、理事会の決議に加わることはできない。名誉会員からは会費を徴収しない。

第15条 会長は、本会を代表し、会務を総理する。

- 2 副会長は、会長を補佐し、会長に事故があるときまたは会長が欠けたときには、会長があらかじめ指名した順序で、その職務を代行する。
- 3 理事は理事会を組織し、この会則の定めるところにより会務を執行する。
- 4 常務理事は、日常の会務を分担して処理する。
- 5 監事は、会計を監査し、その結果を翌会計年度に属する総会において報告する。

第16条 役員の任期は4年とする。但し、重任を妨げない。

- 2 補欠または補充により選任された役員の任期は、それぞれ前任者の残任期間とする。

第17条 本会に、会務を処理するために事務局を設ける。

- 2 事務局に関し必要な事項は、別に規則を定める。

第5章 総会、理事会、常務理事会

第18条 本会は年1回総会を開催する。

- 2 会員は、総会に出席し、意見を表明する権利を持つ。但し、準会員は表決権を有さない。
- 3 議事は出席正会員の過半数で決する。

第19条 理事会は理事をもって構成し、この会則に定める業務を行う。理事会は、この会則

に定めるものの他、会務の執行に際し重要な事項について決定する。

- 2 常務理事会は、会長、副会長及び常務理事をもって構成し、日常の会務の執行に関する事項で理事会より委任を受けたものを決定し、執行する。

第6章 会計

第20条 本会の経費は、会費、寄付金、補助金その他の収入をもって支弁する。

第21条 本会の会計年度は、10月1日から翌9月30日までとする。

第22条 本会の予算は、常務理事会が作成し、総会において出席正会員の過半数の議決を経て成立する。

- 2 本会の決算は、翌会計年度に属する総会において承認を得なければならない。

第7章 雑則

第23条 本会を解散しようとするときは、総会において出席正会員の3分の2以上の議決を得なければならない。

第24条 この会則の定めるものの他、本会の運営に関し必要な規則は、常務理事会の議決を経て会長が定める。

第25条 この会則を変更しようとするときは、総会において出席正会員の3分の2以上の議決を得なければならない。

附 則

- 1 この会則は1997年9月13日から施行する。
- 2 設立発起人および設立総会前に設立準備会によって推薦されたものは、本会の発足と同時に、それぞれ正会員、準会員になるものとする。
- 3 本会の設立当初の役員等は、第14条の規定にかかわらず、別紙1（掲載省略）のとおりとする。
この役員の任期は、第16条第1項の規定にかかわらず、2000年9月30日までとする。
- 4 本会設立当初の会計年度は、第21条の規定にかかわらず、1997年9月13日から1998年9月30日までとする。
本会の1997年度予算は、第22条第1項の規定にかかわらず、別紙2（掲載省略）のとおりとする。
本会の設立に要した費用は、本会がこれを負担する。
この費用は、本会の1997年度予算に組み入れるものとする。
- 5 2006年9月16日の一部改正は2006年9月16日から施行する。

日本ジェンダー学会研究誌『日本ジェンダー研究』(JOURNAL OF GENDER STUDIES JAPAN) 投稿規定

1. 投稿資格：本学会の会員
2. 用語：本文は日本語，レジюмеは日本語以外（当該言語を母語とする人の校閲を受けたものを提出）
3. 審査：編集委員が採否を決定
4. 原稿について
 - 1) 書式 日本文：A4・横書き 1 頁 40 字×40 行（本文 10 枚以内）
欧 文：A4・横書き 1 頁 80 字×40 行（レジюме 1 枚）
 - 2) 形式 章立て：1.
2. 1)
2)
3.
 - 3) 提出：コピー 3 部及び CD（Word ファイルを原則とする）
5. 論文名について：論文名は日本語とし，英語の題名を添える。
6. 注記及び参考文献表記方法
 - 1) 各引用箇所の右肩に¹⁾ /，²⁾ /。³⁾ をつける。
 - 2) 文献は引用番号順に論文末尾に一括して記入する。
 - 3) 雑 誌：著者名，「論文名」，編者名『雑誌名』巻，号，発行年（西暦），頁。
和文例 奈倉洋子「グリムの魔女像をめぐって」日本独文学会編『ドイツ文学研究』12 号，1995 年，13 頁。
欧文例（英文）Klaits, Joseph. *Servant of Satan*. Academic Press, Vol.3, No.2, ed. by Bill Aspinall, Indiana University Press, London 1994, pp.21-25.
（独文）Schmidt, Andreas: *Die Poesie der Kultur*. In: *Zeitschrift für Volkskunde*, hrsg. von Gottfried Korff u.a., 92.Jahrgang. Bd. I, Göttingen 1996, S.67-70.
 - 4) 単行本：著者名「論文名」，『書名』，出版社，第__版（初版以外の場合），発行年（西暦），頁
和文例 森島恒雄『魔女狩り』岩波書店，1985 年（第 4 版），6 頁。
欧文例（英文）Klaits, Joseph: *Women's Studies*, Indiana University Press, London 1995, pp.31-35.
（独文）Mann, Thomas: *Buddenbrooks*, S.Fischer Verlag, Göttingen 1922, S.37.
7. 投稿原稿には必ず日本語以外のレジюме（40 行以内）を添えること。
8. 提出期限：3 月 31 日

以上の規定によることが困難な場合は，日本ジェンダー学会編集委員に問い合わせる。

編集後記

『日本ジェンダー研究』第18号をお届けします。

今号は、論文4本、研究ノート3本に加えて書評も2本と、これまでにないボリュームの学会誌になりました。特に、台湾の会員のリーさん（国立台湾大学）の投稿論文は、昨年の台湾の「ひまわり革命」を分析した興味深いものです。社会運動論を研究テーマのひとつにしている者としては、最近の世界中の社会運動の場に女性の姿が目立つという印象を強くもっています。この7月に実施したイタリア・ヴェネツィアの社会センターの調査でも、活動家の多数派が女性であるというインタビュー結果をえています。社会センターとは、1970年代以後の若者の失業の拡大や貧困化のなか、ヨーロッパで広がった「自由空間／自主管理空間」の動きの一つです。空き家や空き工場、さらには使われなくなった大型施設などを「占拠」して、討論や文化活動の場として活用する運動とっていいでしょう（居住権が日本より強く認識されているヨーロッパ諸国では、一度住みつかれると所有者も介入しにくくなるのです。以前は、激しい衝突もあったようですが、最近では、行政が間に入って協定などを結んで低額の家賃で「使用」を継続するという形になっているようです）。今回実施した1980年代当時の活動家のインタビューでは、運動の中軸は明らかに男性中心だったようです。しかし、今や担い手の多くが女性になっているのです。男性中心の暴力も辞さずという運動形態が、女性が多数派になることで、暴力の抑制がなされ、社会的共感の広がりも生まれているようです。香港や日本の反安保法制の動きにも、女性の動きが顕著です。ジェンダー研究という視座から、この問題をさらに深く研究してみたいとも個人的には思っています。

伊藤 公雄

2015年(平成27)年9月9日 印刷
2015年(平成27)年9月18日 発行

日本ジェンダー学会編集委員会

編集委員長 伊藤 公雄

編集委員 進藤 久美子 野口 芳子
三成 美穂

発行者 日本ジェンダー学会
(Japan Society for Gender Studies)

〒540-0004 大阪市中央区玉造2-26-54
大阪女学院大学 香川研究室気付 日本ジェンダー学会事務局
Tel 06-6761-4052 Fax 06-6761-9373
E-mail kagawa@wilmina.ac.jp
ISSN 1884-1619

印刷所 大和出版印刷株式会社
〒658-0031 神戸市東灘区向洋町東2-7-2
Tel 078-857-2355 Fax 078-857-2377